明治二十九年六月二十四發行

女鑑

第百拾壹號

東京國光社

女鑑第百拾一號目録

近松行重の母



夏は來れり

夏は、來れり。うるはしくやさしかりし春の光りは、はや、はかなく去りゆきて、わづらはしくこわき夏の光りこそ、おくれず寄せ來りたれ。つねのものにはあれど、衛生の道、われも人も孃たちも、わきて、心をこめて、怠らず踏みも守りも爲すべき時にこそ成りまたれ。

衛生の道は、細かなるはし〲まで、わたらむには、いと廣かるべければ、一篇の文の中に、たやすく云ひ盡くすべうもあらねど、むねとある大要をかいあぐれば、まづ、第一に、心のもちかたなり。わが心のもちざまのよきあしきにこそよるものなれ。

人は、心を以て動く物なり。心が主にて、肉體は、これに從ふものなり。心が本にて、肉體は、これが末なり。人が、快く思ひ、苦しく思ひ、いたくおぼゆ、つらくおぼゆるも、皆、心が思ふなり。おぼゆるなり。心が主にて、肉體は、げに從僕の

如し。主の善く正しからむには、これに從ふ者は、自ら善く正しかるべき如く、心の善く正しからば、肉體も、自ら善くうつくしかるべきなり。また、人の心の身體に於ける有樣は、大將と士卒との間の如く、大將の掟、うるはしからむには、士卒のありさまも、うるはしからむたとへにて、心の掟、心のもちざま、うるはしからむには、身體も、自らうるはしかるべきなり。また、草木またたとへむに、根と幹枝葉との如し。根のありさまによりて、幹に枝に葉に、榮えも枯れも盛衰のある如し。かゝれば、心こそ大切なれ。心の掟、心のもちざまこそ大切なれ。心を、うつくしく、正しく、善く、健ならしむべし。さすれば、身體も、自らうつくしく健なるべし。生れてかよわく健ならぬ人といへども、心のもちざま正しくめでたからむには、長き年月にもたへて、めでたき世を保つものなり。彼の飲食に過ち聲色に過ちてなる病の如きは、殊に、心のもちざまの正しからず美しからざるが故にて、そうじて衛生の道の大本は心の持ちざまにあり。如何なる衛生の道も、畢竟詮ずる所は、心のもちざまにこそあるなれ。

第二には、運動なり。ほどよき運動を爲すといふ事も、もとより、衛生の道に於て、

大切なる事は、今更にいふべくもあらねど、さて、其の運動の方法には、いふべき事ゞ多かる。世人は、運動といへば、攀りつ飛びつ猿猴の狂ふが如き遊びならずば、まがりつくねりつ角兵衛獅子の狂ふが如き藝をのみいひ、これならでは、運動にはよからぬやうにいへど、おのれは、女子には、さる器械體操とやらむ柔軟體操とやらむ、奇怪なる運動を好まざるなり。やさしき女子たるには似つかはしからぬさる運動を、ことごとしく爲さずとも、身體を養ふばかりの運動の道は無からずやは。わが思ふ所は、わが窓の塵、わが身のまわりの汚れを、つねに自ら掃ひも浄めもなし、朝夕の營みをも、自ら行ひつとめ、また、朝は疾く起きて、光りあざやかなる園べ或は近きわたりを逍遙し、晝饗の後も必ず、夕げばてなば、又、涼しき夕風に同胞など袖ひきつらねて、園べなり、近き野べなり、逍遙したらむまて、こよなき運動とは成るべしと思ふなり。よしや尊き家富めるきはに生れて、朝夕のつとめより塵掃ひ垢すゝぐ業までも、人の手にうちまかせたる身分の者とても、起居の時を正しく定め、身をいさぎよく正しくもち、朝日夕日に、ふく風あざやかなる園邊の逍遙だに怠る事なく、たまさかゝ垣根の若草をひき、ふりしく木の葉などをかいもあつめ

もしたらむには、それにて、身體を養はむばかりの運動は、あまるばかりならむとおぼゆ、逍遙とて、おのれは女子が、唯一人して、遠き野山をそゞろありきし、或は、朧月夜にうかれありかむなどは、決して好みもすゝめも容るしもはせぬなり。唯わが園囿に父母伴れ立ち、近き野邊に同胞など袖つらねたらむばかりの逍遙のみ。さすれば器械の上に輕業師の手まねせずとも、見よくもあらぬ角兵衛獅子の振舞せずとも、運動は足りてむと思ふにこそ。

そが次には、わが家、わが窓、わが身、わが調度はいふまでもあらず父母のをも、同胞のをも、こと人のをも、つとめて清くいさぎよからむやうに心懸くることにして、そが次には、飲食聲色を謹むべきにて、これは新しう申すことにもあらず。すべて、それらは、心のもとざまにあるなり。孃たち、心を清くいさぎよくもちたまへ。



島の曙（つゞき）

肝付兼行

次に申す事は、御婦人方には、殊に面白くないことでありますが、確な證據ゆゑ申し上げます、統計年鑑に依りまするに、輸出入物品の運賃は、去る明治二十六年には、千六百八十八萬六千圓でありまするに、其の中内國船、即ち、日本の船舶の取りた高は僅に百四十一萬六千圓に過ぎぬ、又仝二十七年には、二千百五十二萬圓でありまするに、日本の船舶の取りた高は、是亦僅々、百二十四萬六千圓である、百分比例にすると、二十六年には（日本船の取高八 外國船の取高九二）二十七年には（仝六 仝九四）になるのであります。海國としては、前述しました通り、實に立派な天賦を具へて居りまするに、其の國の海運として斯る統計を見まするのは、誠に殘念な次第でござります、又船舶の隻數噸數も、廿七年末の管船局の調に依れば、四百四十隻、二十八万二千噸、（尤も百噸以上の船のみにて、百噸以下のものは算入しませぬのですから、百噸以下のものを數へますと、モットになります、又現今では、百噸以上も、五百三隻、三十一萬四千五百噸になりて居ります）ありますが、今、世界中の百噸以上の船舶を計算して見まするに、三萬七百九十二隻、二千四百六十五萬五千噸になります、而して其の中、英吉利の所有が、一萬千六百六十隻、千二百九十七萬噸になりますから、一萬九千百三十二隻、千百六十八萬八千五百噸が、全く世界中他の諸國の所有になるのであります、即ち、噸量では英一國に、他の諸國が総がゝりになりても、遥に及むぬのであります。故に、英吉利の第一番は勿論ですが、第二番は北米合

衆國で、二百十七萬噸、三番は獨逸で、百七十八萬五千噸、四番に位する國は如何なる國かと云ふに、豈計らん、貴婦人方の腦髓に恐らく豫想なさることの出來ない國、此の國が最も我が海國として猛省しなければならぬ國であります。則ち、其の國は、北歐スカンヂナヴィア半島の幾んど西半部を領して居る、諾威でありますが、其の最南端、北緯五十七度にありて、我が占守島より北に寄ること六度、其の面積は二萬八百方里、我が國現今の地積の七割七分。ソコデ、其の國たるや、ドウ云ふ國柄であるかといふに、國の七割一分が不生產地、二割四分が山林、五分か耕地、即ち百坪の地とすると、七十一坪が不生產地、二十四坪が山林で、五坪が田畑であります、依て、陸上に生活を求めることが難いからでありませうが、人口の僅に百九十九萬九千餘なる小國なるにも拘らず、其の船舶を所有することは實に意外で、即ち、三千百三十七隻、百六十六萬九千餘噸(尤も百噸以上のみ)であります、乃ち、我は人口四千三百萬、而も溫帶の大海國であるのに、所有船舶では、世界第十二番目、斯の如き、半ど寒帶に入れる小半島國に、遠く及はぬのである。今平等に、日本人千人、英吉利人千人、諾威人千人に對する、船の噸數を比較して見まするに、諾威は八百三十五噸、英吉利は三百十二噸、我が國は僅に七噸、今度は船の噸數百噸に對して、人口を倒に御話をすると、諾威は百二十人、英國は三百二十人、我が國は一萬三千五百四十八人、つまり、船舶百噸を所有するに諾威は百二十人で之を所有し、英吉利人は三百二十人で之を所有し、我が國人は一萬三千五百四十八人が寄らなくては、之を所有することが出來ない理窟である。ソコデ諾威は、ドンナ外國貿易をして居るかと、前述のものとの對照の爲め、去る明治廿四年中の統計を取りて見るに、其の高一億二千四百十一萬圓、全頭割額六十二圓九錢で

ある、即ち、總額では、全年の我が一億三千八百五十四圓に對して、些し少ないが、其の人口が、何しても、我の二十一分の一であるから、全年が、我が頭額三圓四十二錢を以て、彼に照し合すと、彼は我の十八倍餘である。是、畢竟、其の國柄に對して、彼の人民の、海を利用して居る結果と云ふて然るべきことと思ひますが、彼の北方亙寒の偏土にして、斯くいふ次第でありますから、我か國の如き結構な國にして、其の國民が本氣になりて、海を利用したなら、其の結果は、どこまで盛況を呈するか知れませぬ。偖、未だ此の外にも、海に關する實業については、水産に、其の他に、申上げたい事は澤山にありますが、御婦人方には定めて御迷惑でありましやうと思ひますし、殊に時間も御座ゐませぬから、此の種類の話しは、先づ此の邊で局を結ぶ事に致しませう……是で大概、我が國は有形の原素には富みて居るが、無形の原素、即ち、文化の進歩の、まだ十分でないと云ふ事は御解りになりたらうと思ひます。

ソコで、又、斯く、及ばぬ事のみを並べたてると、今後、我か國の富力は、果して進んで往くだらうかと云ふやうに、憂を抱かるゝ方々があるかも知れませぬが、決して、憂ふるに及ばない、つまり『敷島の大和錦にわたつみの逆捲く浪の綾を織らなん』といふ心になりさへすればよいかと思ひます。

往昔に遡りて、我か國の海事の歴史を調べて見まするに、案外昔は、海事に發達して居たので御座ります。政權の德川に歸してより後、三代將軍の時代以來、船に龍骨を付け、又帆檣を二本以上立てることを禁じ、或は五百石以上の船を造ることを禁じたと云ふは、つまり外國との交通を絶とふといふ政略より、さうなりたものと思はれますが、其の前、則ち、文祿から慶長、元和の時代には、中々愉快な成績が澤山あります。三

代將軍以後は、極力を振て鎖港政略を行いましたが、要するに、其の政略には、國民の土着心を固めて之を海外へ出さぬやうにすることが肝要であるから、國民を、士、農、工、商と別けて、即ち、順序に、商を非常に賤んだ、なぜサウ云ふ風にしたかと云ふに、農業者になると、商業者とは反對で、自然と土着心が堅くなりて、容易に海外に飛び出すやうな心か起らぬ、ソウして、又、鎖港政略を主とするには、國民の生命なる食物を、飽くまでも國内の作で足さねばならぬ、是、絶體的に商を賤め農を非常に重んじて、人心を之に傾向せしめたものではないかと思はれます、而して、其の結果、農業者の多い事は非常でわります、即ち、農、工、商業の全數を百とし、百分比例にして見ると

	農	工	商
日本	七九	七	一四
米國	五七	二九	一四
獨國	四八	四一	一一
佛國	五七	三〇	一三
英國	二二	六八	一〇

斯ふいふ割合になつて、日本は、世界第一の農業國たることを現はします、是全く、鎖港政略の遺物で、或る點に於ては寔に尊び所もわりますが、既に御話をした通り、日本は、太平洋上に於て、最も好地位好地形を備へて居る、運輸に至利至便の海國で、恰も東京の市中でいふならば、日本橋區の眞央ともいふべき町地面を持ちて居るのであります、若し、あなた方にしても、日本橋區の眞央に田圃を御覧になつたら、是は感心な地主であると、恐らく、御褒めにはなるまい、なせ、わたら地面に、商賈の家屋を建てないのであらふかといふ感じが、必ず起るに違ひない。我が國は實に、此の日本橋區たる地面をなして居るので、諺にいふ、土一升金一升の好土であるのであるから、即ち、之を

田畑に使用しないで、其の地面相當に利用し得たなら、東洋に海上權を振ふに餘りあるは固より、遂には、世界の海王權をも掌握するに至り得るのであります。呉呉も、數百坪の都地面は、數萬坪の田舍地面に勝るのでありますから、決して、國土の狹いので憂ふるには及びませぬ。

次に御話し申して置きたいのは、我か人口の、年々非常に殖ゑてゆくことで御座ります、明治十三年より二十五年迄、十三年間の統計を平均して見まするど、人口年々の増加率は、一萬人につき、百三人七分七厘になりますが、今これに基きまして、算を立て　見ますと、六十八年二ヶ月で二倍、百七年五ヶ月で三倍、百三十五年四ヶ月で四倍、百五十六年十一ヶ月で五倍、即ち、百五十七年の後には二億百萬餘になる勘定になりますが、此の結果は、又海運に、漁業に、殖民に、益、海といふものを利用して、商工業を盛んにして往かなければならぬと思ひます。ソコで、第一に商業社會の文化を進めると云ふことが肝要と思ひますが、先きの百分比例に因ると、他と比較的に、之を殖す必要は餘りないと思ふ、即ち、これから、最も殖さなければならぬのは、航業者と工業者である、依て是より、一概には中々さふはゆかぬが、先づ、家督相續者にして、普通なる長男は、軍人なり、政事家なり、何業者なり、其の家從來の職業者となし、次男以下は、成るだけ工業、及航海者に導き、そうして、其の中の、機智慧敏なるものを擇みて商業者となす方針か宜しいと思ひます、商業者には、中々人を擇ばなければならぬです、即ち、貿易家となりて、苟も國の富を増殖しやうといふには、機智慧敏は固より、智識、膽力、堪忍、健康が具備せねではならぬと思ひます。

ソレから、胎敎のこと、胎敎といふことは、ちと、古めかしきことでありますが、併し、必要か無いかといふ

に、ドウも、さうでない、婦人が姙娠をすると、眼に邪色を視ず、耳に淫聲を聞かず、口に邪味を食はず、席正しからざれば座せずといふやうにするが、即ち、胎教である、或る學者は、自分の子を學者にしたいと思つて、胎内に在る中から書を誦んで聽かせたといふ咄がある。ソレから思ひ立つて、私も一つ望を起し、大きに失敗をいたしたことが御座ゐます、即ち、私の望は、一般の讀書は勿論の事、傳記にあれ、小説にあれ、歴史等にあれ、又或る擧動にあれ、海事思想の發達するやうに、幼稚の時から、其の習慣をつけて往かふといふのですが、これには、百聞一見に若かずであるから、御婦人方にも、實地の仕事をして戴きたい、ソレは、即ち、軍艦を看て戴きたいのである、軍艦の中には、大砲、水雷、其他種々樣々のものが整頓して居りて、實に、理學の應用は、一目に認る事が出來る、恰も、海上の敎育博覧會で、海事思想を養ふには、書を讀むに勝ることが萬々であります。海軍では、餘り下等の人は知らず、中以上の人、殊に教育に從事する者の如きは、調練中は兎も角、其他の時に、艦内を拜見したいと云ふて往けば、決して斷る氣遣はない、丁寧に導て觀せますから、あなた方にも、ドウか、軍艦を觀て戴きたい、ソレには、はしけの舟に乘りて、醉ふやうでは仕方が無いから、常から、海に醉はないやうに習慣を付なければなりませぬ、今日の世界的日本、否世界の海國の婦女子としては、當然の擧動で、實に、又さうなくてはならぬと私は思ふ、尤も、先年中流行しました、男女附着いて踊るといふやうな擧動は、あまり私も好みませぬ、御婦人方に對して、麁暴輕躁の事は決して勸めないが、舟にのる習慣は、是非附けなければならぬと思ひます、僅か、海上二三浬の沖合に碇泊して居る軍艦に往く間に、船に醉ふやうでは、迚も軍艦を觀ることは出來ない、又、そういふ腹には、海に強

ひ豪傑は、決して出來ない道理である。ソコで、私が御婦人に望む處は、果して胎教が其の兒の性となるものならむ、日本人は、兎角海事思想が乏しくて困るから、妊娠をされたなら、勉めて舟に乘るやうにして戴きたいのである。仍て、之を、ドウであらふと、三宅醫學博士に話を致したところが『飛んだ事を云ふ……若しソンな事をしたならむ、其の兒は、忽ち、墮胎て仕舞ふ』と、大層博士に笑はれました、ソコで、私も、此の博士の言に成程と思ひましたから、此の後は全く其の望を斷ちました、是が則ち、私の失策であります。ソレは、さて措き、何卒平日其の身体に異狀のない時には、船に乘ることの稽古をして戴きたい、彼の村岡範爲知君、今は京都に往かれたが、もと、音樂學校長を務めて居られて、平素婦人の教育には心懸けて居られたから、私は、嘗て『上野の不忍の池の蓮を殘らず苅り取つて仕舞ふて、之に舟を浮べる樣になし、其の舟に婦人を乘せて、帆を操らせるやうにしたい、あの池の蓮の税は、僅に八百圓計りに過ないのだから、海國婦人の教育には替へられない、君は幸ひ學校が上野に在る事故、ドウか、之を實行するやうにして、漸々、船に慣す端を啓きて貰ひたい』といふた處が、ソレは實に妙案だ、如何にも贊成だと、是は、先づ、叱られなかつたので御座ゐます、併し、終に實行を見るに至りませぬでしまいました、又或る友人は、日本の婦人は、深窓の内に在つて、荒き風にも當らん所が、尊いのであるに、其を、お前の言ふやうに海の風に當て丶ドウなるものか、殊に、婦人の貴い所は擧動の靜肅にして、心の柔順なる所にあるのであるといふて、大に反對しましたが、其の説の可否は兎も角つまり、是れから後、眞正の海國男兒を養成するには、第一其の母親が、海を恐れるやうでは仕方がない

（未完）

婦人交際の事に就て

玉の屋主人　巖夫

我が國婦人の交際に就ては、上代の事は暫く之を云はず、中世以降は、甚だ其の區域の狹きものにて、或は親戚の者か、若くは極めて入魂なる朋友故舊等の外には、及ばさゞりし慣習にてありしなり。我が國が斯の如き習慣となりしは、畢竟、支那學の專ら行はるゝ國と成たりしが其の原因、となりしは今更に云ふまでも無けれど。中にも、德川幕府以來、各藩をして互に相往來せしめず、國々各自に其の事情を相通ぜざらしめて以て、日本全國を支配するの得策と爲したれど、各藩に於ても、亦、各自に其の領分の士民を、猥りに他藩に出でしめず、專ら其の領內に封固を置くの風となせしより、殊に甚しく右の風習とはなりたるものなり。

斯の如くにして、男子すら、他國他藩の人と交際することは、容易からざりし事なれど、況てや婦人にして、廣く交際する道絶えて無りしは、又奇むに足ざることなり。但し此は、德川幕府時代の、我が全國に就て云へる事なるが其の時に在りても、京、江戶、大坂等の如き、諸藩入込の都府に於ては又格別のことにて、其の交際も稍弘かりしことゝ云ふまでも無けれど。其は下等社會の事にて、中等以上の婦人にありては、諸藩に於けると大差あることゝ無く、矢張少數の親戚朋友間に止まりて、其區域の甚だ狹かりしものなり。故に其の交際より及ぼす關係の如きも、亦隨て甚だ廣からざりしを知るべし。

然るに、明治維新の後に至りては、全く前日に異り、藩を廢して縣を置れ、所々の關所を止め、舊來の弊制を改め、諸國の通路を開放して、來往を自由ならしめ。人士の上に於ても、華族、士族、平民の三等を立られたるも、交際の上に於ては、平等を得せしめ、毫も隔絶すること無きを期し、漸次に道路を開鑿し、鐵道を布設

し、電線を架し、電話を設け、得らるゝ限りの便利を與へ、駸々乎として以て進ましめ給ひしより、全國宛ら一家の如く、弘通せざるを得ざることゝなりたれば、隨て婦人の交際も、是と共に其の區域の廣まるべきは、即ち然るべき道理。今日となりては、是、亦、全く男子に異ならざるものとなり、唯內國人の交際のみに止まらず、外國人とも交際せざるを得ざる場合も無きこと能はず。時としては、婦人にして歐米各國に遊ぶもあり。又各國との改正條約を實行せらるゝ事も遠きにあらざれば、外人我が國に雜居し、內國人の各外國に雜居するを見るも正に近きにあらんとはするなり。斯る時世となりては、婦人交際の關係を他に及ぼす所、甚だ少なからずして輕々に見過す可からざるものとはなりたり。

是に於て熟く考ふるに、時世は前述の如く、維新の前後に於て、霄壤も啻ならざる差異を生じたるにも拘はらず、我が國婦人の交際（否な男子に於ても同樣の弊あれども、其はまた別に云ふべし）は、依然として舊面目を改むること無く、種々の陋習を脱せざるもの往々少からざる中にも或る、部分に遺存せる、最も弊害と認むべきものを擧げんに。其の婦人等の會合たる、動もすれば人の陰事を訐き、人を批難するを常とす、譬へば何某は背が高きとか卑きとか、顏が丸きとか長きとか、物が分るとか分らぬとか、衣服が古きとか見苦きとか、髮が上りたるとか下りたるとか云ふより始めて、其の起居進退に就き、言語藝能に就き、先其の非なるものを擧て之を難じ、甚しきに至りては、人の行狀に立入り、一身の進退に係り、一家の存亡に關し、其の家其の身に取りては所謂大事とも云ふべき程のことにても、用捨無く之を言ひ騒ぎて、毫も憚ること無く、兎にも角にも人の批評を爲し、他の失態汚點を陳列して、警官か探偵家かの如く、何か珍らしき事を探

し出し聞き出して、其を持出すを名譽の如く思ひ、得意に之を相語り、其の最も甚しきに至りては、針の如き小事をも棒の如くに云ひたて、或は、無根の醜聞を捏造して之を人に誣ひ付け、一時の戲言となし、當坐の諧謔となして怪まず、然るに一犬虚を吠ゑて萬犬實を告ぐとの諺の如く、其の一時の戲言、當坐の諧謔は、人より人に傳へて終に事實の如く取囃され、意外の寃に陷らしむるもの往々無きにあらず、實に氣の毒の至りならずや、縱令斯の如きの甚しきものに非ずして、或は顏の丸きが丸きと云はれ、衣服の古きが古きと云はるゝの類、皆實事なれど、其の云はるゝ本人となりては、固より一言も無き筈なれども、其の人に成替りて思ひ見るべし。斯る非難を受たることの耳に入りたる時、如何なる感をか起すとする、必ず不愉快を極むるは固より云ふを待ざるならん、既に不愉快を感じたらんに、其の非難したる者を慕はしく思ふ情の起るべき道理無きは。是、亦、見易き所なり。唯に之を慕ふ情の起らざるのみならず、必ず之が復讐を爲さんと欲するは、又、人情の免がる可からざる所なり、斯の如くにして、恨を人に求めて、自己にも何の益かある、實に詰らぬことなり、而して何にもならぬ僅かの事より。情誼を破り、交際を疎くす、其の害の及ぶ所如何ばかりぞや、最も愼むべき事なり。

以上述ぶる所は、我が國維新以前よりの餘弊なり、然れども舊幕時代に在りては、婦人交際の區域、甚だ廣からざりしを以て、其の害を及ぼす所も、亦、左までには、有らざりしならん、然れども、現今となりては、前にも既に云へる如く、其の害を及ぼす所實に少々ならざれど、甚忌むべく惡むべき弊なりと云ふべし、此の頃、數年間歐州に留學したる、某氏が歸朝しての話を聞くに、彼の各國などにて婦人社會(男子にても)の交際たる、中には種々の弊無しとも云ひ難かるべけれ

ど、其の大體に就て之れ云ばんに、大に之に異なるものありて、人の惡評などすることは、夢にだも見ること無く、實に愉快千萬なるものなりと云ふ。先、彼等が會したる時の如き、多くは實業の話とか、慈善の話とか、若くは宗教、又は音樂等の話をなし、其の他世事の話をするに至るまでも、總て有益なることを相談するを以て目的とし、成る限り無益の事を避るの常なり、況んや有害の事をや、然れど、談、若し他人の身上に及ぶこと有りとせんか、極めて其の失態欠點を擧ること無く、必ず其の有るが中の美事善行をのみ云ひて、之を稱讃す。故に相語る間にも、自然に人を奬勵するの効わり、且、愉快にして面白からざること無く、又、他日其の人の聞くところとなるも、彼亦愉快を感じて、一毫の不平を懐くべき由無く、却て、互に其の交情を厚くするの益わり。斯の如くにして、一家族は一族家にして其の交はり益す深く、郷黨朋友は郷黨朋友にして愈ゝ親密を加へ、例へば一村は一村より、一郡は一郡より、一縣は一縣よりと、順を逐ひ、次第に隨ひ、結局英國は英國の一團體となり。佛なり、獨なり、魯なり、伊なり、澳なり、其他總ての各國が、各自特色を具へて、互に其の國をなし居るのみならず、又其の各國が互に國と國とにて交際する、所謂國交際なるものも、亦之に依て立ざるはなしと、是を以て彼の外交家が、或は心の中には、互に劍を磨きて、一朝事破烈に及ばんか、忽ち兵力に訴へ雌雄を決せんとまでの覺悟を爲し居りつゝも、事破るゝに至るまでは。互に成るべく感情を害せぬことを力むるも、亦、此の情を擴めたるものに過ぎずと云ふ。斯の如くにして、開明を以て自ら誇る、歐米各國の使臣等が、皆、其の夫人を率ゐて任地に赴き、唯、公務に從事するのみならず、或は舞踏會に臨み、又は晩餐の饗應に會し、夫人は夫人と情誼を通じ、互に國交際の親密を計るは、

即ち方今の情態なりと。

今、此の歐洲各國婦人の交際と、前に述たる我が國婦人今日の交際と比較對照せば、其の差異如何ぞや、實に同日の談に非ざるを知るべし、然るに前に云へる如く、我が内國人互の情誼交際は益々親密ならざる可からず、團結は愈々鞏固ならざる可からず、又、外人雜居ともならば、獨り外交官のみならず、普く我が全國人を擧て、男となく女となく、皆、外交家の心得ならざる可からざる世となりたれば、兎にも角にも、從來の弊風は專全之を一掃して、毫も其の跡を止めず、見事に眞正なる開明國の實を擧げざるを得ざるは、目下の大急務なり、因て爰に一言すべし。其は前に述たる、我が國婦人の交際に他人の非難評判を爲す、能く人の陰事を許き得たり迚、如何程の益を得るものとするか、又、其の失態欠點を、熟く非難し得たれば迚、如何程の愉快を感ずるものとするか、深く顧み思ふべき事に非ずや。實は一毫の益無くして巨大の妨害あり、一點の愉快を感ぜずして莫大の憂患を遺す、誠に愚昧の事たるを免がるべからず。之に引かへて、歐洲婦人の交際の如きは、常に人の善美を擧て、彌々これを完全ならしめ、其の醜態汚點の如きは、知るも之を口外することと無く、人は假令人たらずとも、我は我が道を全くすべきものとし、眼光は常に世界の大勢を照し、心意は、專ら自國の利益に注ぎ、一言一行と雖も深く之を愼みて、苟もすること無く、言へば必ず快樂を感ぜんことを求め、行へば必ず幸福を得んことを求むるもと、其の利害得失言はずして明白なるべし。故に、余は我が國の婦人に望む。自今何卒此の舊弊を一掃し、會すれば必ず人の善美を擧て、其の醜を云はざる事とし、近くは一家族より其の親密を計りて、漸次に全國に及ぼし、結局我が國をして、眞正なる開明國たるに至らしめんことを、是、余が只管希望して止まざる所なり。

女學校創立主唱者

藤田武光

徳川氏、幕府を、江戸に建てゝよりは、專、儒教を以て、天下國家を治め、爾來、戰國の餘をうけて、殺伐の氣を帶べる人心をして、ひたすら、平和の方面に向はしめんとし、つとめて、儒者を奬勵し、大に、儒教の興隆をはかれり。こゝに於いて、いはゆる漢學、大に起り、したがひて、いはゆる國學、また、盛なるに至り、その他、諸種の學術、技藝、並び起るにいたれり。かゝれど、各藩に於いても、競ひて、これに倣ひて、とほく、儒者を招聘し、あつく、學士を優遇し、或は、學校を建て、或は、學館を興して、藩士の子弟以上を教育したりしなり。ことに、當時は、學藝を修むるに、從來の如く、ある階級のものに限らるゝことなく、志あるものは、何人も、これを修むることを得たりしかど、あらゆる階級にて、これを研究したりき。即、各地の私塾につきて、各その好むところを研究したりしなり。

右の如く、修學の道、やゝ開けたりきといへども、これ、みな、男子のためのみにして、男子のためには、たとへ、不充分とはいへ、學校、學館のほかに、私塾さへありき。また、小にしては、各地に、寺子屋ありて、不完全ながらも、ある點に於いて、一般子弟の敎育をなしゝなり。しかるに、女子の敎育は、いかなるありさまなりしか。實に、世間何人も、すてゝ顧みざりきといふも、不可なき姿なりしなり。たゞ、貝原益軒、中村惕齋先生など、その他、二三の人々の、女子敎育のために、諸種の有益なる敎訓を著されたると、志ある父兄の、おのが家庭に於いて、その兒女を、わづかに敎導せるとのほか、女子の學校の如きは、殆絶無の姿なりしのみならず、その必要を唱ふるものすらなかりしなり。

この時に當りて、女學校發起之趣意をものして、女子教育の忽にすべからざるを唱へ、女學校の興さゞるべからざるを論ひたるは、實に、江戸の人奥郁氏なり。氏が、之を唱へたりしは、今日より六十年前、即、天保八年にして、その論ふところ、一々、當時の情弊を穿てり。曰はく、

謹みおもふに、我が大御國は、北極地を出づること、三十度より、四十二度以内にありて、四季の氣候、よくとゝのひ、地中、金氣多くして、水清く、甘く、土硬く、堅きが故に、其の水土に孕れ、その氣候をうけて生ずる萬の物、みな、萬の國に優れり。是を以て、本號を、豐葦原の水穂の國といふ。水穂は、稻穀の總名にして、人命の本たる水穂に、萬を含ましめて、御神の名づけたまへるものなるよし。其の水穂を、食として生育する人の性なれば、是、亦、萬の國に優れること、自然の道理にて、是を、大和魂、大和心ともいふなり。さればこそ、開闢の古より、外國に犯されたることなく、天津日の御繼、絶えせず、世界に獨立して、遠き西の國の書にも、傳統の帝國と稱しるせるを以ても、其の尊きことを知るべし。まして、此の二百餘年、神祖の御武德によりて、四海、干戈をわすれ、睦みまじはり、東北のかぎりなる外が濱に生れし者も、西南のきはみなる長崎の人に使はれ、西北の隅なる新潟に住める女も、東南の端なる熊野浦の男を、夫として、萬の民、己がまに〳〵、業を安んじ、あくまで、昇平の恩澤に浴するは、人間世の幸、此の上もなき有りがたき事ならずや。されど、治平長くつゞく時は、上下、奢侈遊惰となることは、ためしあることにて、支那の書にも見え、昔より、鴻儒の論ずる所なれど、雀情を以て辨ずべきにあらざれど、その弊、男子よりも、女子は、なほ甚し。然るに、これを論ずる人なきは、

遺憾といふべし。近頃、東都町々の女の、驕に超過したることには、櫛、笄、衣服の花美は、いふもさらなり。有徳の者の妻妾をはじめ、その日暮の人の女房、娘までも、髮結女に、髮を結はせ、湯屋の男に、脊を洗はせ、前垂の紐に、縮緬を遣ひ、下駄の鼻緒に、天鵞絨を用ふる世の中となり、風俗、殊の外、いやしくなりたり。さは、義太夫ぶし、新内節の女淨瑠璃の殖ゑたるにても知らるゝことぞかし。この女淨瑠璃の族、大都會の町人の身分にて、見物に、顏を晒らし、乞食、非人にひとしき所業をなすこと、渡世とはいひながら、淺ましき仕方なり。ろの根本を考ふれど、みな、其の母のならはしにて、元來、右体の所業を、よき事に心得て、幼より、その藝をしこむことより、其の子も、亦、これにならひて、よき事と覺ゑ、母親に、三味線箱を脊負はせ、巳がはき物を提げさせて、親を、供に連れ、つん〳〵として、市中を徃來し、親子とも、恥を恥とせざるにいたれり。これをも忍ぶべくんば、孰をか忍ぶべからざらん。又、この節、歌舞伎役者の化粧の仕方を眞似て、鼻と、へりとを分けて、白く、白粉すること流行せり。是も、右等の族より發りたることにて、かれ、高き床の上、薄ぐらき處に居りて、淨瑠璃を語るなれど、見物に、見のよろしきを好み、役者の舞臺顏を眞似て、化粧せしものなれど、その側にて見るときは、斑にしていやしきものなり。さるを、素人の、色くろう瘠せ、にくげなる女などの、右の姿を、よしとし眞似るは、淸女がいひし類にて、見ぐるしき物ぞかし。その外、女に似氣なき異なる化粧の仕方を好む族も見ゑたれど、くだ〳〵しけれど、こゝにいはず。元來、右等の町藝者、土弓場、茶屋女などは、色を鬻るものなれど、髮結女に、髮を結はせ、湯屋の男に、脊を洗はするも、尤の事なれど、是も、素

人に推移りたる故、町々、女髪結、數多出來、湯屋の留桶閙しくなりたり。下流塞りて濁るときは、逆して、上流を濁らするにいたる如く、右の弊風、自然と、上へもおよぼす道理にて、武家にも、間々、いやしき風俗の女も見ゆるは、歎かしきことならずや。扨、又、女子の藝といへど、琴三味線、胡弓、鼓、笛、太鼓、踊等の遊藝しらぬは、恥のやうに覺え、機織り、絲とることとは、いふもさらなり。物縫ふことを習ふをさへ、いやしきわざのやうに思ふ風俗となりたり。故に、身上相應に暮らすものは、幼より、娘に、踊を習はせ、多くの金錢を費して、衣裝、道具等をこしらへ、こゝのさらひ、かしこの祭など、、親々も、倶にうかれて、附添ひありき、見るにたへがたき淨瑠璃狂言などを、その子に踊らせ、鼻の下をのばし、見物する親の存意、わかりがたし。踊を習はする時は、身のしこなし、よくなると思ふは、心得違にて、子供に、いやしき風俗を仕つけ、色情の導をなす仕方にて、しかも、年とりては、用たゝぬ藝なり。それにつゞき、鼓、笛、太鼓等、是、亦、生涯の用にたゝず。三味線、胡弓は、わけて、淫靡なる中にも、胡弓はいやしく、非人の女太夫などのすべきわざにて、素人の娘子供の弄ぶまじき器なり。琴も、むかしは、組といふものばかり彈ぜしと聞きしに、今は、長唄はさておき、淨瑠璃へも合せて、聞くにきかれぬ文句を語り、彈くことになりたるは、淺ましきことぞかし。第一、手習の師匠といふもの、むかしは、門弟の子供の敎へ方、厳しかりしに、今は、あまり厳しくては、子供は、いふにおよばず、その親々の氣にも入らざる故、師匠の方より、子供の機嫌を取るやうになりたれど、子供の仕つけの爲にはならず。殊に、右の技藝人等が所爲を眞似て、折々、揃の浴衣、そろひの手拭を染めさせ、社中に貸

りつけて、遊山を催し、頭上に、造華をさゝせ、大勢をひきつれて遊行し、その弟子の多しといはるゝを、見どしたるなど、手習師匠の所業にはあるまじき事歟。右等を以て、風俗のいやしくなりたるをしるべきなり。男子には、師を取り、身を修むる道を習はしむれど、女としては、學ぶもの希なる故に、女の法あることを知らずして、右の惡風になりゆくこと、口惜き次第ならずや。（つゞく）

女子敎育一斑（十九）

三輪田眞佐子

世人曰ふ。現今、女生寄宿舍の狀態を見るに、生徒の多くは、ひたすら、舍監の歡心を失はゞ、以て試驗の評點に影響せんとのみ恐るゝばかりにて、さながら、自己のため品行を愼まで、反りて他人の觀察を憚るめれど、決して、獨を愼むなど、内心に女德を守るものならむと、されどにや、これまで、嚴重なる監督を受け居りし女子の、一朝その校を出づる曉には、女德を守るもの少かるめり。そは、世人の言の如く、學生たるもの、唯、舍監の注目を苦しとのみ思ひ、外容は正さんも、内心を治めざるものならむには、もはや、業を卒へ校を出んとき、必、反動の理によりて、あだし小徑を歩むものあらん、そはなべて、公立女學校の弊風なりとかや。

これにひきかへて、舍監を憚らざるものは、法外に、なれ〳〵しうなりて、たゞ、生徒等は、舍監を以て、自を看護する人とのみ思ひなして、甚しきは、命令をおろそかにすることさへありとかや、蓋し、かゝる情態は、私立の女學校に多しといふ、そは、私立學校は、經費に制抑せられて、生徒の欽慕するに足る人物を撰びて、舍監にあぐる能はざれどなり、寧、私立女學校の弊は、徒らに生徒の増加を望みて、反りて、その歡

心を迎ふ傾きあるより、かゝる形跡あるものにや、あないみじ。

かく、舍監をも、一は恐れ、他は嘲る、以上は決して、女生の徳育を全うすること能はざるべし、おのれ思ふに、寄宿舍を改良するには、第一流の婦人を撰びて舍監となすべし、すなはち、女子の模範と仰ぐに足る人物を擧げて、もて青年女子を感化すべし。然るに、今日の實際は多少學力ある故を以て、舍監に任じ、その操行を問はざるものから、生徒の敬服心を起さしむることなく、反りて、その心中、彼の汚れたる行を卑むばかりならんには、いかでか感化し得ん、さりとて、相當の女事を履みしことある婦人ならんも、學識なきものは、亦、生徒おのづから、輕蔑の念を起すのみならず、舍監の位にある人も、自らの無學を耻ぢて、遠慮するに至るべし、されど、才徳兼備の人にあらざればを、舍監になすべからず。わきて女子は、學校を出づるか否や、忽、父母舅姑を安じ、良人に事へ、子さへ育つべきを以て、柔順の徳、恩愛の情を養ふべけれど、寄宿舍にあるころより、なるべく、かゝる任務を盡さしむる方針をとるべきなり。是をもて、女生と舍監とは、全く親子の關係を有ち、朝夕の禮義を始め、女事一般を實習してこそ、始めて世人の望を滿足せしむるなれ。

蓋、かゝる組織の寄宿舍を設くるには、多數の生徒を一所に集め、剩へ一人の舍監にては、到底、その主義を實行すること難きを以て、今日までの如き寄宿舍を全く廢し、別に一校のため數箇の家塾を設け、德望ある師、此等を分擔してその膝下に置き、學事は學校に出でゝ學び、課業を終ふれば家塾に歸り、師と共に寢食するは更なり、師のもとへ來る客人などの取次をなし、亦、茶をさゝぐるなど、一般の女事を勤めしむべし。かくするときは、生徒の父兄どもは、その三四あ

る家塾につき、その師の學風、及び人物につき、各適當と信ずるところへ依賴すべし、本來、人は性質身分、あるは、將來の目的など相異ならんを以て、相當なる師のもとに居るこそよけれ、然るに、もし、舍監一人の寄宿舍ならんには、幸に適當の人物を得んも、かゝる便益はなかるべし。

まことや、かゝる組織の寄宿舍ならんには、弊害なうして、しかも、便益ならむ、なれど、相當なる師を撰ぶことの難きのみならず、かゝる組織の寄宿舍とて、決して、子を思ふ親の情より出づる注意には及ばじ、故に、女生はなるべく父母の膝下に留め、止むを得ざるときは、親戚知人の家に居り、なほ、止む能はざるときに限り、上に述べし如き制度の寄宿舍に入らしむべし、必ず〳〵、今日の如き寄宿舍にな入らしめそ。

但し、父母の監督を受けて、家庭に居るは、最良の道ならむも、未だ教育の心得なき家庭は、亦、弊害あり。殊に親類なども、事情に制せられて、この嬢や、義理あれど、このことはせしむべからず、させんには、交情を破る恐れあり、且つこのことは言はじ、もし言はんにはかれ怒らんと。敬して遠くる姿より、修德の害となること少なからず、一層甚しきは、隱居したる人の家、若くは、下宿屋などは更なり、一般知人のもとに托せんも、見識なき家には、朝夕の寢起に規律なく、及び、男女禮なきなど、多くの惡風に感染するとかや。あはれ、こを思ひ、かれを考へむ、いよ〳〵、女子德育の難きを知らむ、なほ、女子の家庭教育は、いと肝要なるを以て、後章に於て別にものせん。

あめつちのきはみ御てらす高光る
日のおほかみの道はこのみち

天地のかみのめぐみしなかせしば
一日一夜もありねてましや



近松行重の母

鹽井ふく子

をなし民草なれど、高き卑き品あるべきにあらねど、士農工商とて士人の殊にはじめに云はるゝは、思へど、よしなきにあらず、士人は、よく文武の道をおさめ、よく順逆を知り、私の慾をほしきまゝにせずして、よく公義につき、亂れたる世には、暴をこらし逆ふを伐ちて、靜謐をなし、治まれる世には、よく道をしき敎へを施し、上は天子の命に從ひまつり、下は萬民を安堵なさしめ、何事も人民の模範となるもの故、三くさの民草にさきたちて、はじめにはいはるゝなり。男にさわれど、女も、また然り。そうして、士人の妻となり母となりたるものは、凡ての慾を去り、心をいさぎよくし、よく思慮をめぐらし、萬一不幸にして危難あるときは、つゆもやうなき身命を惜む事せず、いさぎよく夫に子に先きだちて、貞烈の心を高く守るべし。かく治まりたる今の世に、逆境の事など述ぶるは、をもしろからず、何のやうもあらずと思しめさん人々もあらんも知らねど、一治一亂定めなき世、苟も道に志さん人ならんには、太平の歌うたひよろこばん中に、なほ、大刀劍さわがしからむ世の事を、ゆめも忘るべからざる事なりかし。

近松行重といふは、淺野長矩の家臣なりけり。彼の元祿の主家の難にあるや、行重、母なる人を奉じて、江戸へ出で、その族人の家をたのみて入れまゐらせ、己れは、その側にさやかなる舍をつくり住み、朝な夕なに怠らず母をとひ、起臥つゆのいとまなく、心の限りをつくしてつかへけるが、もとより四十八士の同志な

りけれど、いよ／＼明日の夜は、吉良氏を打ち取らんと定まりけれど、事の由わからさまにうちあけて、いとま乞ひ、某等先殿の恩を受け侍る深さ、母上もよく知ろしめし給ひてならむ。義を思へど、とくに、赤穗に死ぬべく候ひしも、今日まで、かく、ながらへ仕りしは、如何にもして憎き吉良どのを一太刀うらみ奉り、先殿が地下の怨をはらし奉らまほしきばかりに、死すべき命ををしみ居りたる事にこそ候なれ、今うれしくも、仇家にうち入らん隙をたま／＼伺ひわたり候へど、かねて志をかたちひわはせし者どももとうちはかり、時の失ふべからざれどとて、いつといはず、明夜やがて打ち入りて、年ごろの志を果さんとは思ひ立ちて候なり。わが身、たとへ、いかならむとも、固より惜むべくも恨むべくも思ひ候はねど、親いまさど遠く遊ぜずと申候を、かく大人しくればしたてたまへる御慈愛の萬分の一をもかへしまゐらせず、長くこれを限りに御分れ申しまゐらせて、はやよらせたまへるれん年波に、一入うきをかけ奉るがかなしく、これのみが思へど／＼かなしくも口惜くもいとほしくも限りなき心の亂にこそ候なれ。併はあれ、今、其、生を偷みて、いやしくも、逃れも隠れも候はんには、かつは、國恩にろむきまつり、かつは、士道にもはづれ候て、御兩親の御名をもけがし、先祖をもはづかしむるのもとにて、中中に忠孝の道兩ながら失ひ候事に候へど、思ひ定めてれんいとまたまわりにまゐり候なり。返す／＼、はかなきなげきなせられそ。くれ／＼も御身をいたはりたまひて、いつまでも世を長うしたまはんこそ願ひまゐらするなれとどかり、流石鐵石の武士の心も、そゞろなげきに沈みたるが、母は、之を聞きて、いたくうちよろこびて、吾れも、はやよはひ傾きぬ、正に旦暮にあるものを、いつまでとかたのむべき。幸に我が子の節義の道に仆れ、古人と名を齊しくするを聞かど、如

何ばかりか、我がやがてゆくべき世への思ひ出なでらむ。かゝるうれしき事のあるべきか。何の悲き事の、かなしき事のあるべき。たゞ恨みぞ。さばかりの志、何とて、とくには母に知らしたまはで、我をして、など、平生を以て子を待たしめたまひたる。之のみが口惜しと云ふに、行重、やゝ涙を拂ひ、此の事、濁きに、母上に聞え上ぐべかりしを、今日までよろにうちすぎ候ひしは、もしやよしなきれんなげきに、思ひ沈み玉ふやうあらんにはと思ひ候て、わざと告げも語りも仕らでこそ候ひしか、杖柱の數には候はねどもれんろむ近う侍べりしものゝ亡くなり候はんには、嘸かし御心細くおはしならせたまふならんが、必ず〱何事をもうち捨て玉ひて、くれ〲も御自愛のほどこそいのりまゐらするなれ、君のためとは申しながら萬分一の孝養をもつくしまゐらせずして、かくて先きだち奉る罪みれんとな笑はせ玉ひそ、母上、かなしく候と、こぶしもて拂ふ兩眼の涙。げに、わが子、さもあらむ、さもればねむといひつゝ、つく〲うちながめたるが、何思ひけむ、母親はつと起ちて己が房に入りたるまゝ、久しうなるも音もせず、姿も見ねず。行重、何となう心とどろきせらるゝもあやしきに、往きてうかゞへど、こは、そも、いかに。母は覺期の自刄、佛前に押しなほりたる膝さへくづさず、したゝかにのどもとをかききりてうつふしたる傍に、行重どのへ、と、筆のあとさへいさぎよく、かきとゞめたる一書、行重は、ものもいはねず、走りよりて、抱けど、起せど、甲斐なき亡骸にとりすがりて、しばしは、よゝとばかりに甚なきに泣きさけびたるが、思ひかへして取りあぐる書、泣くな、泣きそ、行重、行けや、立てや、今こそ立つべき時なれ行くべき時なれ。親をも、子をも、何心よわくかへり見るべき時ならむ。さるを、今、わが故に、汝がうしろがみひかれてか何となう思ひいさまざるけしき。

汝もかゝりの孝子の心にはさこそあらめ。われは、よはひはや傾き、また惜むべき身にもあらず。只今たちて、汝がうれひを亡し、武士の道を安くつくさしめんとこそ思ふなれ。行けや、いさぎよく。人になれくれろ、いさましく。汝がほまれ天かけりてころ見め。うれしさよ。泣く事もなし、かなしむこともあらず、母のよろこびあだになせそ。これのみぞと、水ぐきの跡さへさだかに教へ遺されし言の葉をよめば、思へば、いよ〳〵有り難くもかなしく、行重は書をかゝへて慟哭せしが、やがて心を靜めて、さにあるべきにあらねば、家主に、吾れ久しく浪々の身となりて、朝夕のたつきもおぼつかなくのみなりまさるに、ひとり胸のみいためたるがあまりに思ひあまりて、たま〳〵母にももらせるに、母之をきゝていとゞかなしさに見かねたるが、斯までに、思ひせまり玉はんとは心付ざりし、あさましさよ。今は、いくらもあらざらん餘生にすがりて、我が子をわづらはさん事を悲み玉ひて、かくは思ひ立ち玉ひしならんと思ふなり。今更に千度悔ゆとも、及ぶ處にあらず。吾れ趨りて親しき友をたのみきこえ、明日つとめて野邊のおくりをいとなまんと思ふに、願ふは我がために、尸を護りてよと云ひつゝ、遂に書を留めて治葬の事を託し、幷に金若干を封じて之を尸の傍に置て去り、やがて、あけの夜めでたく仇敵をうち、主君の恨を報じたりしと云ふ。忠臣多く孝の門に出ると云ふ。げにや行重の如き忠なり孝なり、誠によく士の道をつくせしものと云ふべく、その母も、また誠に士の妻となり母となりて耻ぢざる女子にこそありけれ。げに子も子、母も母、彼の父の首を見て、かなしさに思ひせまりて自ら死なんとせし正行の孝心、これをとどめて勤王の志をはげましたる正行が母、これとは、事かはれども、おなじく、世の鑑とも敎へとも、かたりつぐべき美談にこそ。

いと女の孝行

三熊思孝

いと女は、若狹三方郡早瀬浦、佐左衛門が妻なり。孝心深く、よく舅姑に仕ふ。姑は、先に死し、舅年八旬に餘り、老耄して、非理なる事をいひのゝしれども、少も逆ふ色なく給仕す。

ある日、いと女、外より歸りたるに、老人藁をちらして、孫とあそぶ「何事なし給ふ」と、とへば「子産むまねしてあそぶなり」といふ。さらば、われも、子を産まんとて、又藁を持ち來り、同じく戯れど、老人興に入ること斜ならず。其の他のあつかひも、おして知るべし。（蕉嘆云老萊子が兒戯をなすにならはずしてあたれるものなり）一とせ、深雪、軒をうづむころ、茄子の羹を食はんといふ。いと心よくうけがひ、近きほとりの寺に走りて、茄子の糠漬をもらひ、水にひたして鹽を去り、羹にしてすゝむ。

又、一年冬の頃、鮮き魚をもとむ。折ふし、海あれ漁なけれど、いかにともせんかたなければ、さらぬさまにもてなして、門に出で、とやせん、かくやせんとおもひ煩ふをり、忽、足のもとに、魚をどりたり。いと女、天を拜みて、よろこびて、即、調じてすゝめけり。隣の人見しには、鳶、魚をつかみ來りて、いとが家の棟にとまりしが、やがて、魚を落して飛び去りたりとぞ。これ、誠に孝の心、鬼神に通じけるならん。つひに、其の行狀を、國侯聞し召し、米若干賜り、家の租をも免じ給ふとぞ。

（續近世畸人傳）

高みくらあまつ日嗣た日の御子の
　うけつたへますみちはこのみち
天の下あなひさぐさのあまよひに
　御かげさよそるみちはこのみち
あめのした國はおほけご靜ろぎの
　うみなしませるおほやしまくに

（本居宣長）

は、例の如くしてよし、体の花の前に、葉三枚を組合せて置べし、春の頃は、花より葉を長くし、初夏より追〳〵氣候に合せて、花を長く立延びたる様に活るを法とす。

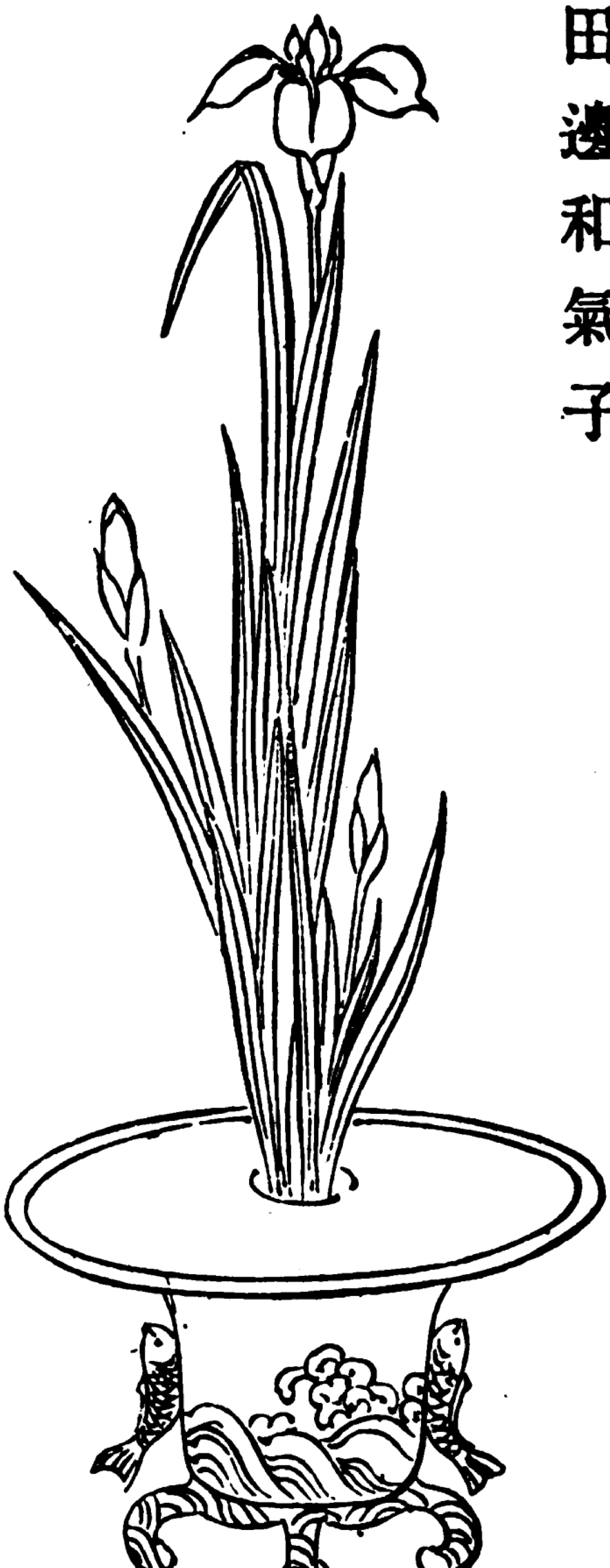
家政

いけ花（十八）

田邊和氣子

杜若

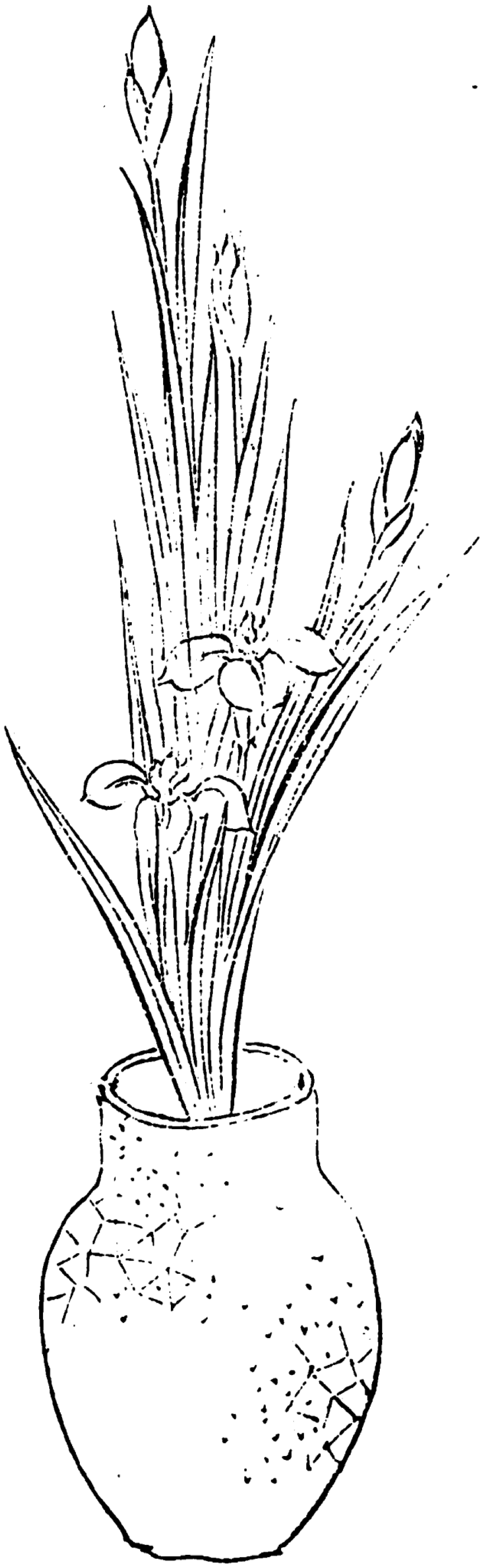
杜若は、和らかなる草なれど、活るには、やすからざる物なり。葉に裏表あり、これをよく見わけ、且、葉の先には、爪の如き所あり、何れの葉も、此の爪を、向ひ合せにして組合せ、花を包む様にすべし、眞副体の寸尺



同　五本

五本活るも、法は同じ事なれど、花壹本ごとに、葉を

も數を加ふべし、眞の前に花一本、副にも一本あしらひを加へ、体を一本とするもよし、また、眞を一本として、体の前中程の所へ、つぼみなど添るもよし、猶、花、葉の都合によりて、何れへ加へるも差支なし。葉數多くなる時は、活るにかたきものなり、よく工夫をなして、花及び葉の、しをれざる樣心を用ゆべし。



たちぬひ

西山たい子

（卅七）男帶のくけかた

まづ品の、のびちゞみを見て、能くのばしおき、おまりに耳のちゞみたるものは、少し、はさみにて耳ばかりの處をかきて、のばすべし。

さて、あとさきより縦の方少しばかりを縫ひおき、よく角をたつやうにして、眞とすべきもの丶巾を、よく、

同じやうに合せ、中に入れて、絎るべし。また、縦の半ばを、少しばかりわけおきて、他を皆ぬひ、帯しんを、ぬひ目にとぢつけ、引きかへして、くけるもよし。

男帯



女帯



（卅八）　女帯の縫ひ方

女帯も、よく初めにのびちゞみを見て、品によりては、火のし鏝にてなほし置き、両脇をこまかに、縫ひ縦をも、少しばかりわけおきて、他は皆縫ひ、しんをばとぢつけ、引きかへして、よく引き合せ、あとさきの角をたて丶、絎るなり。眞は、一分ばかりせまくなすが、よろしきやうなり。

そうじて、帯はやさしきやうに見えて、中／＼、むづかしきものなれば、よく／＼心を用ひ、中にて、しんのたるまぬやう、ちゞまぬやう、初めによく／＼注意してなすべし。中にも、男物は、一入に心を用ふるべし。

だいどころ

○病人に與ふべき食物は、常に醫師の言をまもり、み

だりに調理すべからず。病によりては、脂肪を忌み、又は、肉類、或は、野菜を避くべきものあり。

○病人は、兎角榮養の足らざるものなれど、之に與ふべき食物は、滋養多きを要するは勿論なれども、其の消化の力も亦弱り居れば、極めて消化し易きものを擇むざるべからず、左に其の調理の二三種を擧ぐべし。

病人用「スープ」

上等の大麥三十目を淘げ、之れを「ソース」鍋に投じて多量の水を注ぎ、暫く煮たる後、其の湯をこぼし、一度冷水にて洗ひ置き、脂肪少なき上等の牛肉、又、犢の肉一斤を細かにきざみ、他の「ソース」鍋に入れ、之に水六合を注ぎ、前の大麥を投じ、食鹽を能き程に加へて文火にかけ置き、「オランダミツバ」少量を細に刻みて之れを「スープ」に加へ、文火にて五六時間煮るべし、既に煎たれど、毛篩にて漉し置き、病者の要する時、好き程の量を温めて皿に注き、此の中に、さいの目に切りたる麵包を入れて與ふべし。

牛乳「スープ」

上白米一合を、能く淘ぎたる後、一合四五勺の水に、五六時間程浸し置、之れに少量の食鹽を加へ、鍋の蓋を為て、文火にて三十分間程煮たる後、三合の牛乳を注し、少量の白砂糖を加へて更に煮ること三十分間を要すべし、前の如く、乾麵包、食麵包を細かにきりて入れるをも宜し。

米「スープ」

上白米三合を能くとぎ、之れを熱湯に投じ、凡十分間煮たる頃、笊に揚げ、別に「スープ」鍋に水一升を入れ、之に脂肪分少なき牛肉、または鷄肉少量を細少にきりて加へ、前の煮米を投じ、能き程に食鹽を和し、三十分間程文火にて煮るべし、此の「スーフ」は、病人又は病後衰弱したる人抔に之れを用ふれは、大に滋養の効あ

りといふ、病人に與ふる鹽加減は、甘き方を佳しとす、又病者の好みにより、少量の胡椒又他の香料を和して與ふるも宜し。

湯煎「スープ」

新鮮の牛肉、又は鶏肉を細かにきり、硝子瓶、或は燗徳利の中に詰め、コッロフにて口をなし、之れを、沸騰したる鐵瓶の中に投し、湯煎となし、凡三時間程過て取出し、器の中に、肉液の溜れるを茶碗に注ぎ、少量の鹽、又は醤油を和して進むべし、是、肉の元精を取りたるものなれは、滋養の効あれども、餘り多量に用ふるは宜しからず、一日の量凡三十目位を宜とす。

病は口より入り
禍は口より出づ



日本文典（十二）

鹽井正男

前に申したる、將然の格と、已然の格との事に就きて、なほ一言申すべきあり。そは、「雨ふらば」といふと「雨ふれば」といふを、おなじやうに思ひて、變ることなく用ふる人あれど、大なる誤謬なり。「雨ふらば」といへば、いまだ雨は降らぬなり。もし雨が降つたならばといふ意なり。故に

雨ふらば花散らむ

といふやうに用ひ、「雨ふれば」といへば既に雨が降れる意にて、

雨ふれど花散る

といふやうに用ふ。其の區別よく〳〵思ひをくべし。

六、命令の格

命令の格といふは、動作を他に去かく〳〵せよと指圖する時に用ふる格にて、これは、已然の格のまゝにて爲すもあれど、多くは、將然の格に「よ」といふ語を添へてあらはすが、普通なり。例へば、

親の歌は腰折れなれど、あこは、たけ高くよめ

たゞ、學ぶ事のみは、藍よりいで　、藍よりも猶あをからんことを願へ

などいふ時の「よめ」「願へ」の如きは已然の格のまゝにて、命令の意をあらはせり。「よめ」も「願へ」も四段に語尾の變化する動詞、即ち、四段に活く動詞にて、

よま、　よみ、　よむ、　よめ、
願は　願ひ　願ふ　願へ

といふやうに活きて、「よみ」も「願へ」も已然の格なり。此の已然の格のまゝにて、命令をあらはすなり。併し此の下に「よ」を添ふ事をも得て、「よめよ」「願へよ」といふ時は、やゝ命令の意を強むるやうになる如し。四段に活く動詞にあらずとも、奈行變格と良行變格とは、已然の格のまゝにて、命令をあらはす。例へば、

疾く〳〵去ね

親に似よといはまほしけれど、愚なる親よりは勝りてあれ

あこの心は鏡玉のやうにあれ

などいふ時のいねあれにて知るべし。これも、又此の上に「よ」を添へてあらはす事をも得。

其の他の類は、多く將然の格に、「よ」といふ語を添へて命令の格と爲すさま、例へば

朝は五時に起きよ

あしき友は捨てよ

古の賢き人のかける書を見よ。
此處へ來よ。
世のまじらひ、人をさきに立てゝ、みづからを後にせよ。

などいふを見よ。皆將然の格に「よ」を添へたるなり。

この六格にて、動詞の格は、まづ終りとして、こゝに、動詞の活きざまの異れる限りを、正格變格共に一ッ宛あげて、其の格をあらはすさまを示さむ。

	終止の格	連体	連用	將然	巳然	命令
四段言	行く	ゆく	ゆき	ゆか	ゆけ	ゆけ
上二段言	起く	おくる	おき	おき	おくれ	おきよ
下二段言	受く	うくる	うけ	うけ	うくれ	うけよ
上一段言	着る	着る	き	き	きれ	きよ
下一段言	蹴る	ける	け	け	けれ	けよ
加行變格	來(く)	くる	き	こ	くれ	こよ
左行變格	爲(す)	する	し	せ	すれ	せよ
奈行變格	去ぬ	いぬる	いに	いな	いぬれ	去ね
良行變格	有り	ある	あり	あら	あれ	あれ

斯の如くにて、四段に活く詞にては、終止の格と連体の格とは、仝一なり。上二段に活く動詞にては、連用の格と將然の格と、仝一なり。下二段にても然り。上一段に活く動詞にては、終止の格と連體の格と仝一にて、連用の格と將然の格とも仝一なり。下一段に活くも相同じ。此處にあげたるは、各種の動詞の一個宛をあげたるものにて、仝種類に活く動詞は、皆、斯の如く格をあらはすなり。

動詞の命令の格は、前にいひたれど、今はいはず。

動詞が、いろ〳〵の心ばへをあらはすありさま。

動詞は、いろ〳〵の心ばえをあらはさむために、其の語の下に助動詞を添ふ。これを動詞の尾辭ともいふ。動詞の語尾に添へて、いろ〳〵の心ばゑをあらはす故なり、而して、これによりて、動詞に、いろ〳〵の性質を作り出すなり。もと、動詞が、自らのまゝにて有てる性質の種類は、たゞ自動と他動との二しなのみにて、ろの區別は、はじめに述べたり、併し、此の尾辭やがて助動詞の助けを得て、また、他にいろ〳〵異れる性質を作る。例へば、「讀むと」いふ動詞に、「る」といふ語を添へて、「よまる」といふ時は、おのれが力に爲し能ふといふ意を含む動詞と成り、又「讀ます」などいふやうに、「す」といふ助動詞を添ふる時は、他の人を遣ひて爲さしむる意をあらはす動詞となり。又これに反して、「讀ましめらる」といふやうに、「しめらる」といふ助動詞を添ふる時は、他人よりさやうにさせらるゝ如き意を有する動詞となり。また「讀みたまふ」、「讀ませらる」などいふやうに、「たまふ」、或は「せらる」などいふ辭を添ふる時は、恭敬の意をふくめる動詞となる如し。他にも、なほさま〴〵の性質をふくむやうなる故に、いま、かたはしより、あら〳〵かいつらねむ。

動詞に、かく、さま〴〵の性質、やがて心ばゑを有たしむる尾辭、即ち助動詞には、七種あり。

一、「り」。

この助動詞は、四段に活くなる動詞の已然の格の下に附くる時は、其の動作が今現に、去かある意をあらははす動詞となる。例へば、

雲と見るまでに、花さけり

といはゞ、今現在、花が見ゆるまでに盛りに咲きてある意をあらはす如し。此の助動詞は、良行變格の「あり」の如く、「ラ、リ、ル、レ、」の四段に變化し、而して、たゞ四段に活く動詞の尾辭と成るを得るのみなり。

二、「らる」

これは、下二段に活く動詞の如く、「ラレ、ラル、ラルル、ラルレ、」といふやうに活きて、これを四段に活く動詞にあらざる動詞の尾に置く時は、其の動詞は、三種の性質を有する、詞となる。第一は、他より受くる動作をあらはす詞となる。即ち受動詞ともいふべきやうの詞となる。例へば「師に敎へらる」の「敎へらる」の如し。第二には、自らが能く爲し能ふ動作をあらはす詞となる。即ち、能動詞ともいふべきものなり。たとへば、「山も越えらる」といふ時の「越えらる」の如し。第三には、尊敬の意を有てる動詞となる、例へば、「父は只今起きらる。」などいふ時の「起きらる」の如し。この助動詞は、たゞ四段に活く動詞には附くを得ず。他の類の動詞の將然の格の所に附くを得るなり。

歌の栞（一）

鹽井正男

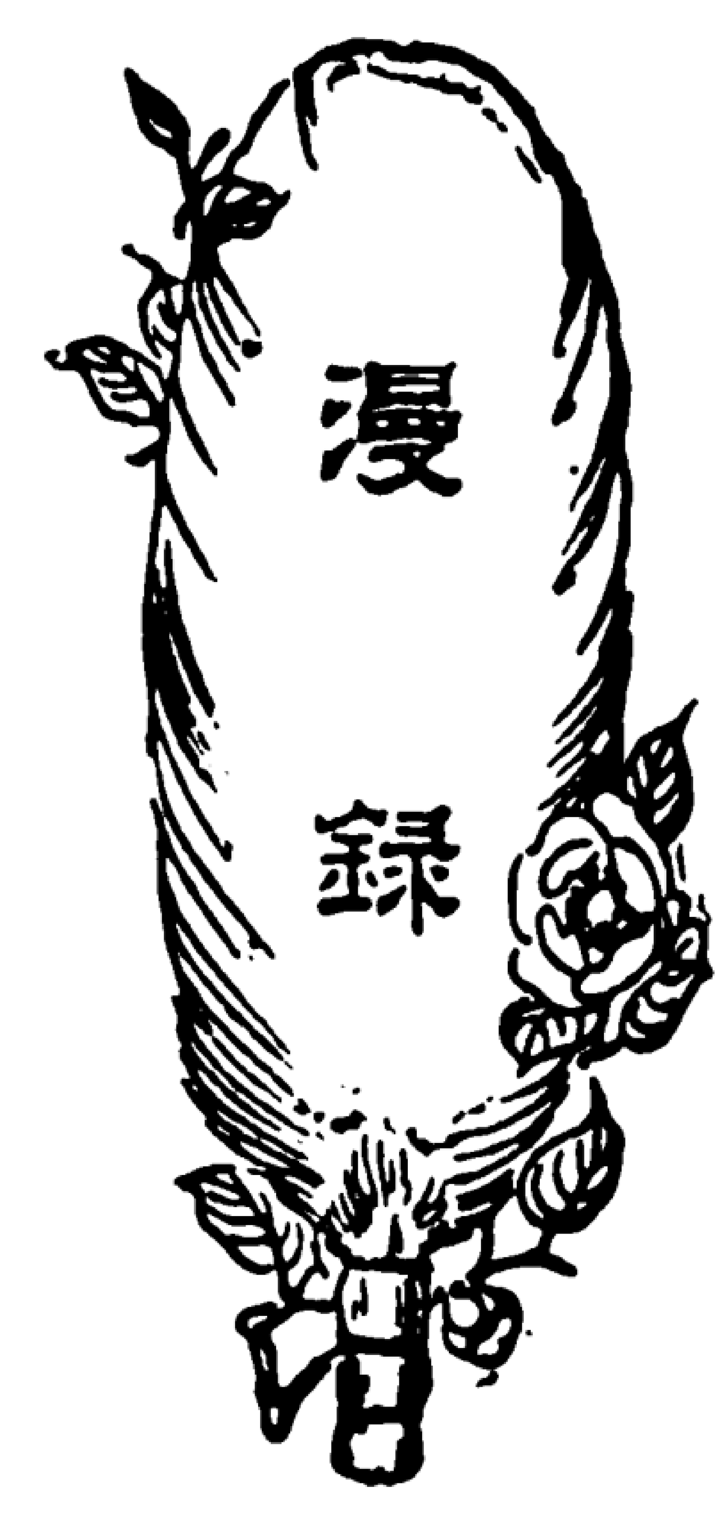
はしがき

やまと歌は、人の心をたねとして、よろづの言の葉とぞなれりけるとは、貫之ぬしが千古の名言。げに、和歌は、わが感情想像など、やがて、わが心に思ふこと浮ぶことを、めでたき言の葉の色に染めもあらはしも出るものにて、さて、その目的は、むねと、かくて、わが心、世の人の心に、面白しとも、あはれとも、思ひ樂しましめ、かつは、世の人の心を、よろこび慰むると共に、世の人の心を、いよ／＼、あはれにうるはしう、氣だかき方に導きも誘ひも進めもすべきものなり。されど、いかならむとも、何ならむとも、心に思ひも浮べる思ならで、これもかも善く、また、何ならむとも、くれならむとも、言の葉ならで、それもこれも善からむとはいふ能はず。たゞに思ふ心を、言の葉にだにあらはさで、それが歌ならむとは、いふべからざるなり。貫之ぬしが歌の種なりといふ心、やがて、うた

はむ思想は、つとめて世のつねを出でゝ、うるはしう氣だかくあはれならざるべからず。また、これをあらはさむ言の葉も、つとめてめでたくうるはしくあはれならむを擇らざるべからず。また、其の言の葉に、その思想をあらはさむありさま、やがて、其の思想のあらはし方、その言の葉の用ひざまをも、つとめて、あはれにうるはしくめでたからむやうせざるべからず。これ、皆、もとより然るべきことゞもにて、さらでは、人に美妙なる觀念を起さしめ、人にうるはしく氣高き歡樂を與へ、かつ、人の心を、うるはしう氣高き方に進ましむる事は、むづかしきなり。否、むづかしきのみならず、とても、なせぬわざなり。そのもとは、ともあれかくまれ、今は、かくて、歌も一種の技術なり。畫や音樂なぞゝ、全じく一種の技術なり。されは、その種なる思想、及び、これをあらはす言葉の色、及び、これを寫し出さん言の葉の色の用ひざまに、そうしてめでたくうるはしきを擇らむ事は、畫かくにたとへても知るべし。畫をかくにも、山水にまれ、人物にまれ、花鳥にまれ、その描かんずる物、描かむずる趣向は、もとより、うるはしからざるべからず。歌に、思想のうるはしからむを望むも、これと全じことざまなり。また、描くには、筆も墨も繪具なぞ、すべて、うるはしきを擇らざるべからず。歌に、言の葉のうるはしからむを望むも、これとおなじ事なり。また、畫かくには、たとへぞ、山水の畫にていはむに、山のおきざま、水のやり方、草木などのくばり方、あはれにたくみにうるはしからざるべからず。歌に、思想のあらはし方、言葉の配合の方法の、めでたくたくみにうるはしからむを必要とするも、これとおなじことわりなりかし。されぞ、歌をよまむには、まづその種なる本なる主なる心、やがて思想といふもの、次には、これをあらはす言の葉、次には、言の葉の色に、その思想をあらは

す有様、皆、共にたくみにうるはしからむやう心懸けざるべからず。歌の道をきはめむには、これらいづれにも、皆深く心をとむべきにこそあれ。さなくては、道の奥がをきはめて、言の葉の玉も花も拾ひがたきにこそ。

思想は、もとより、人々の心の掟がらにて、それは、一朝一夕のはかなき文は、語りも教へもなせず。言の葉も、一々かいあげむは、短き文には叶ふべくもあらず、且つは、言葉の擇り方は、いと次ざまのものなれど、こゝにはいはず。たゞ、おのれが、こゝに孃たちの歌の道を行きたまはむための栞にとて、かい記るし申さむは、たゞ思想をあらはさん有様、即ち、言の葉を以て思想をあらはし出さむ方法、言の葉の配置などにつきて申さむとするなり。されど、それとても、もとより、必ずかくと、法律の規則のやうに定まりたるものあるにあらず。たゞ大かたのことのみ。



十六夜日記を讀みて

安藤紫光

藤原氏、權を失ひて、平安朝の華麗なる文學、やうやううつろひゆき、世は武門に歸して、文學の方面暗黒に葬られなむとせる鎌倉時代に於きて、所謂國文學は、僅に公卿歌人等の筆によりて、一縷の命脈を維がれぬ。此の時代に當りて、一抹の光明を放ちて、黄昏をてらせるものあり。十六夜日記是なり。その記する所、僅に鎌倉下りの日記にすぎず。その敍する所、阿佛尼の充分なる手腕をふるひしものにはあらねど、文は、いとなたらかに書きなかされておもしろく、情は、いと

細やかにあらはされてあはれなり。是を推して鎌倉時代文學界の一明星といはむも、敢て不可なかるへし。一日、閑に乘して之を讀む。よみもてゆくに、その子をれもふ心のふかき、轉、人をして感にたへさらしむ。正に是、土佐日記に比すへきものか。

彼の土佐日記、此の十六夜日記、共に記行文にして、その筆致も亦、相似たり。然れとも、その最相似たる所の者は子に對しての情にして、一は、子を失ひたる心のかなしみをうつし、一は、子を思ふ心の闇を描けり。よむ人をして、思はずも涙くましむ。いでや。一つ二つの節をぬきいてゝいはむか。

阿佛尼か、子を思ふ心の闇しのひかたく、萬のはゝかりをも忘れて、いさよひの月にさそはれいてけむ程の心やいかなりけむ。

頃は、み冬たつはしめのさためなき空なれは、ふりみふらすみ時雨もたえす。嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れちりつゝ、事にふれて、心ぼそく悲しけれど、人やりならぬ道なれは、往きうしとてもとゞまるへきにもあらて、何となくいそきたちぬ。

けに、子をれもへはこそ、かよわき女の身もて往き、うき道にもいてたてるなれ。さてまた、別にのぞみての事など、いと細やかに記したり。その心つかひなべてにはあらず。

代々にかきれかれたる、歌の草紙とものゝ奥書なとして、あだならぬかきりをゆりしたゝめて、侍従のかたへ送るとて、かきそへたる歌、

和歌の浦にかきとゝめたる藻しほくさ
　これを昔のかたみとも見よ
あなかしこよこ浪かくな濱千鳥
　ひとかたならぬあとを思はゝ

これを見て、侍従のかへりごといと疾くあり。

つひによもあたにはならし藻鹽草

かたみを三代のあとにのこせむ

迷はまし散へさりせは濱千鳥
　ひとかたならぬあとをそれとも

このかへりこと、いとをとなしけれは、心安くあはれなるにも、昔の人に聞せか奉りたくて、又、うちしほたれぬ、丈夫の、傍さらすなれきつるを、振りすてられむ、名殘、あなかちに思ひ知りて手習したるを見れは

はる〳〵とゆくさき遠くしたはれて
　いかにそなたの空をなかめむ

とかきつけたるものより殊にあはれにて、同し紙に、かきそへつ。

つく〳〵と空ななかめぞこひしくは
　道遠くとも早かへりこむ

とぞ慰むる。

俊成、定家、爲家、と三代まてうちつゝきたる詠歌の家。その代々にかきおかれたるをえりしたゝめ、爲相の方におくりて、よこ浪かくなといましめたるに、そのかへりごとのおとなしさにつけても、またなき夫爲家をしのひいてたる、さもこそあらめ。さては、爲守の、いかにそなたの空をながめむとかこちたるを、はやかへりこむとなくさめたる。つきぬ名殘、いかゞなりけむ。此の親、此の子、其の眞情、共に人を泣かしむるに足る。さて又、紀の内侍に、爲相、爲守のことなどたのみきこえて

君をこそあさ日とたのめふる里に
　のこるなてしこ霜にからすな

などあはれふかしや。

彼の土佐日記十二月廿七日の條に

かくあるうちに、京にて生れたりし女子、こゝにして俄にうせにしかば、この頃のいでたち、いそぎをも見れど何事もえいはす。京へ帰るに、女子のなきの

みぞ悲しみこふる。ある人々もえたへず。この間に
ある人のかきていだせる歌、

　都へとおもふものゝ悲しきは
　　かへらぬ人のあればなりけり

又ある時には

　あるものと忘れつゝ猶なき人を
　　いづらととふぞかなしかりける

といひける間に云々

とあると、兩々相對して、一は後におもひおきて、遙なる旅路にいでたち、一はなき人を旅の空に殘して、故郷に歸らんとす。いづれも、心のなげきは限なかるべし。

阿佛尼が、和徳門院の新中納言より

　いかばかり子をおもふ鶴のとびわかれ
　　ならはぬ旅の空になくらむ

との歌をおこされては、

　それ故にひと別れてもあしたつの
　　子をおもふかたは猶ぞこひしき

とかこてるは

　世の中におもひあれども子をこふる
　　おもひにまさるおもひなき哉

と、土佐日記にかこてるといづれ、おとりまさりはあらざるべし。又、侍從の宰相の君の許よりの歌を見ては

歌も、いとをかしくなりにけり。五十首に十八首、點あひぬるもあやしく、心の闇のひがめにてぞあるらめ。

といひて、そのかへりことに

　こひしのぶ心やたぐふ朝夕に
　　ゆきてはかへるをちの白くも

秋ふかき草のまくらに我ぞなく
　ふりすてゝこし鈴虫の音を

などかきつけたる。又爲守のもとよりも、三十首おく

りきたりしを見ては、今年は十六ぞかし。歌のくちなれは、やさしくれはゆるも、かへす〴〵心の闇とかたはらいたくなむ。といひて、これにも

かりそめにたちわかれても子をれもふ
れもひをふじの烟とぞ見し

とかへりことしたる。彼の土佐日記二月四日の條に、この泊の濱には、くさ〴〵のうるはしき貝石など多かり。かゝれば、唯、昔の人をのみこひつゝ、船なる人のよめる。

よする浪うちもよせなむわがこふる
人わすれ貝れりて拾はむ

といへれば、ある人たへずして、船の心やりによめる。

わすれ貝ひろひしもせじ白玉を
こふるをだにもかたみとれもはむ

となむいへる。女兒の爲には、親をさなくなりぬべし。玉ならずもありけむをと、人いはむや。されど、死にし子、顔よかりきといふやうもあり。と、しるしたる。げに、人のれやの心は同じければなるべし。れしなへて、この日記は、情にもろく、感につよき、女子の手になりたるものなれど、その心情あふるゝとかり、文字の上にあらはれいでたり。それ、たゞ、子をれもふのみならず。無き夫爲家をれもふことの深き、その所々に見えたり。今はさまではとてこゝにはあげず。

げに、三世まで、ありがたきためしある家を、空しくせしと、なでしこをれほしたつるは、その心つかひ、いかでればろげならむ。その深き心をもたる人のかけるこの日記、それよみて、いかでたゞにやはとて。

にせもの語り

下田春園

第一　むかし男ありけり、ひとりの女のわらわをもたりけり、かたゐなかになむふすぶれたりける。都のてぶりえたはしくやれもひけむ、いさゝかのえるべをよすかにてなむいでゆきける、家も時めく家なりけり、かしづく人はたいと多かりけり、おほかるなかにひとりのうないはなりありけり、十といひてみつか四をやこえぬめり、其の女世の人にはまされりけり、かたちよりも心よりも人のよせなむまされりける、ひめぎみにやと思ひしもあらず、ゆかりある人の子なめりとれもひしもあらず、つほねたつ所にれはすけなり、殿もはたろこにやれはすらむ、あしたには、ろこよりうちにまかて、ゆふべには、うちよりろこになむおかれにける、皆人めざましきものにいひのゝじりけれど、ゐなからとも、やがて、ろれなりけるはとさとりにけり、れもひの外の事なれど、いかりもし、なげきもして、むねもつぶれにけむ、みやこの手ぶりは、はやうくつれにたり、山れくぞ猶こゝろやすかりけりとて、やがて、ゐてかへりにけり、さていつるとて

千尋にと誰かいはひての黒髪の
　いてふくづしはくつしそめけむ

となむかきれきて出でたるとぞ。むかし人は、かゝるむくつけき心なりけりとなむ、いとあさましかりけることなりけり。

第二　むかし男ありけり。常になやみがちなる人なりけり、いたつくところのありとしもみねず、われからなやめるにやあるらむ、くすしどもはあらしといひても、その醫者はいたれるものにあらしとて、うつらうつらと月日をなむわたりける。かゝる病は、われからまねく事れはかりけり。こゝろゆくあろびなどよかむなむとて、繪といふものをなむならひける、くすしも

困じやはてたりけむ、よくもあらず、あしうもあらず、なま〳〵なるくすりをなむあたへたりける。いかなるをりにかありけむ、其の男ゆくりなくかゞみにむかひてけり、日頃のいたつきに、いみじうおとろへにけり、おものいろざしもあしかりけりなど、みづから脈をとりて見れど、常のやうにもあらざりけり、舌をいだして鏡にうつせど、こはしもいかゞしたりけむ、ゆゝしきまでにかはりにけり、あなやとおもひてむねをさぐるに、むなさきにおとるものありけり、いかゞしたるものにかと、ひたひをさぐるに、みうちのぬくみさへそひたりけり、こは、かの山水にこゝろとられて云ゝこらしたりけるなりけりとおもふに、われひとりのみもおさめがたくなむなりにける、家人にはおせて、ふすまをひかせ屏風などたてめぐらして、さて其の内にふしたりけり。をり〳〵くるしげなる聲などたつるに、家人は足をそらなり、醫師よ、法の師よとのゝしりありくに、くすしも來れりけり、男もやう〳〵うつしこころつきたるけなり、いかゞおはすととへど、から〳〵なりといふ、其の聲さへたゆげなりけり、其のくろかりける舌はと問へど、かくなむとて出してけり、實にくろきこと墨のやうなりけり、醫師、とみかうみて、ふとおもふ事やありけむ、水をもて、うがひをなむせさせてける、くすしこれを見れど、則、墨なり、ねふれる筆の墨なるはとおもふに、ふきいてつべくなむ成りにける、かゝみもてきて、これみたまへかし、もとにかへりぬらむといふに、これみれは、誠に常の色なりけり、ひそかに脈をみても常のやうなり、ひたひをみても常のやうなり、あなうたてやと思ふに、たゞむねのみなむおとりける、其の男いとおもなげにかくなむ。

こゝろさしふかくこめてしをりけれど
消えあへぬゆきの花とみゆらむ

といひけるとなむ。まつりことおろそかなりとてやみ、

君王のさかいちはやきとてやみ、いたつく處ありとしもみしぬに、われからなやめる人々なむ、いまの世にはれはかりける、うかひさすべきくすしはいまいつこにか有るらむ。

第三　むかし男ありけり。すみける所は島國なりける、いかなるをりにかありけむ、人の國になむわたりける、こゝにすめるひとりの女ありけり、いとあてなりける女なりけり、なやめる程にやありけむ、いとう、れもやせたるさまなりけり、常よりなむなやめる樣のあてなりける、男かひまみてけり、ふるさと人のことなとれもふ頃にやありけむ、こゝろをうこかさざるにしもあらさりけり、ゆくりなく立ちよりてけり。女あさましとやおもひけむ、むねへしうぞもてつけたりける。さすかに島人なれどにやあるらむ、いひくづすべきたはかりもあらず、われもむねへしく、いづこをかなやみ玉ふと問へど、なやむところもあらじとなむいふ、かゝる藥はいかでかととへど、女口とく、かくなむこたへける。

人の身はやまひのふくろはころびぬ
先きにろ口はぬふべかりける

とてなむ異言をもいはずなりける、男口惜き事かぎりしもあらず、さてなむかへりにける。猶わすれがたきは、ありつる人のさまなりけり、いかて其の人のごときをみむやと、れもひこらすことさへ朝毎夕ごとなりけり。ふるさと人それをきゝ得て、吾が身のつぶへとこしたるをなげき、すこやかなるをなむいとひける、男おはれとや思ひけむ、諸共にまとひにまとひて、藥かづけてなむのましめける。これをきく人島なるも、國なるも、知るも、知らぬも、みなとよみてわらひにけるとなむ。

第四　昔男ありけり。うひかうぶりしてゐなかにくたりにけり、ゐなかのならはしにや有りけらし、れな

しどちどちうとひてものくひ、酒のみなどして、たはれことなどいひしろひて、心のまゝにうちふるまひてある所なむありける。此の男れもひけらく、世にあるはどはかくころあらまほしけれ、われも天地のあひだにはらまれたるひとつのいきものなり、人も天地のあひたにはらまれたるひとつの、いきものなりけり、横にはらはひ、手をのどし、足を　し、身をまろどしたりとて、人のさまたげをなさむころあれ、さらぬかぎりは、なでふことのあらむかし、目はみるべく、耳はきくべく、口はいふべく、こゝろはれもふべく、手はとるべく、足はゆくべく、これ天地のなしのまゝなり、上も下も皆人なりけり、高きもひかりのあるにはあらず、低きもしりをの有るにあらず、れもふことにさかひをさだめれ、行ふことに垣をゆひしは、をさなきほどの事なりけり、かく人となりては、たれかは父母のいさめにのみしたかはん、天地のたゞしきさためはかくなむあるべきなどれもへりける。さてなむかへりてける、かへりて後は、ものをいひても、ことをなしても、常のごとくもあらざりけり、れもへりしこと共を言にいたしていふ事も有りけり、父母も心にとめざるにしもあらざりけむ　いさむれたいさむるとて、ありつるふるまひをなむしたひける、わかき程のすさびなめり、いく日もありはつましなど、あたなたのみも年月をわたりぬ、家人さへけにてそなどれもふもいできにけり、親は子に孝をもとめ、子は親に慈を求め、もとめてやまざる時は、ゆゝしきことも出で來ぬめり、孝と慈とのはからひをさためて、家の様をたもたむは、誠にやむごとなきことゝなめれど、時の人はなはめさましきものにいひあへりけりとなむ、ある人かくなむよめりける。

はへばたて立てはあゆめとれもひいる
　　親のこゝろにのるうなひかな

第五　昔おうなありけり。くね〳〵しきさか　にやあ

りけむ、めはしひたるやうなりけれど、嫁のおちめをむひろひにけり、ぬひものしてありけるほどに、いわしといふ魚をうり來る市人ありけり。嫁をよびてかはせむとするに、なきほどなりけり、例のこゝろやおこりけむ、みつからもとめてけり、嫁、みづをくみてかへり來にけり、みるよりはやくうちふくだみ、きのふのいをはいみじうたかゝりけり、わこがかせしことゞもはみなかくなりけり、けふのはかずこそたらされ、こよなうたけ長かり、おことはいつはりいひて、おのしろをや、わが身につけたる、さらずむいとをこなりけり、家のうちつことはねうましかりけり、ひるちかきに家にもあらず、いつこをか經ありきたる、わかはらをはさむとにやあるらむなど、なま人わろきまではしたなめけり。嫁もまめたちてぶつ〳〵といふ、おうないよ〳〵たけり立ちて口さかなくいひのゝしる、さりとて、さはたけ長くもあらざるものをといへど、きのふのは

ねとうできてくらべよなど、よゝみたる、は、したかみつつ、とりもくひつべきさまなりけり、までなむかたはらにありけるが、おはむは、めがねをかけたるものをといふに、心づきてまみおしのべてうつぶし見れど、すなはち、きのふのおなしいをなり、げにぬひものをちらして立ちたりとて、おくにいりてにけり、ある人これをきゝて

おのが目のそひらにあるをわすれつゝ
　いでし筒井にまたかへるかな

となむよみたりける。いさゝかなるきずもとめして毛をふくものもおほかりけり、めかねかけたる人いまもなからましやは。

第六　むかし男ありけり。すむところは、かたゐなかなりけり、其の男こゝろさま世の人にはかはれりけり、貧しき身にもあらざりけらし、人のよせまはゆからむことをなむよろづよりこゝろゆくわざとはしける。に

なうかしつくむすこに、うしろみをなむ迎へける、このさとのならはしにやあへかむなむ、嫁むかへたる時は、いろ〳〵のいりおやのきぬどもを買ひても着、かりてもきて、れちこちをひめありくことなむ、身のほどほどにつけてありける、此の時とやおもひけむ、其の男たからをつくして、からのやまとの いろ〳〵のにしきをもとめて、しきでものにれくりけり、さとにても尙もとめにけむ、ころは春なりけるを、時うつりて夏も末つかたになむ成りにける、蟬の羽衣は見所もうすかりなむ、十重廿重うちかさねむも、時にやたかひぬらむ、さまで心入れのふかゝりつるものをと、人々はわたらしがりて、いひのゝしりけり。れやなりける人、例のことなるこゝろやもたしかたかりけむ、れもふにはたがひて、冬のもとどもを、かたもまろむぞかりぞきせたりける、つれたつ人々うたてきものから、正しみひとりのみかゝらむもつきなかるべし、これはた世の中のまじらひなりとて、冬のもの三つ四つぞかりづゝかさねたり。つゆぞかりの雲だになく、てりはたゝく夏日影は、あらかねの土もさけなむやうなるに、正しみはいふもさらなり、なかうどの女房、れくり嫁、むかひ嫁、あなひの女房、下部のものまで皆汗をぬぐひつゝぞありきける、ある人これを見でかくなむ、

　ことなれどれやのこゝろをつくしわた
　　まねふも人のあつきなさけか

いさしらす、奇を好むは昔も今もれなしかりけり、ろれをまねふ人はありやなしや。

第七　昔男ありけり。ゆめにめじろといふ鳥になむなりにける、友をたづねて里近う出でにけり、友なむものゝかげにひろみたりける、よびかはして、やがていひよりてけり、うれしとれもへぞ、たちまち、われをとらへむとするものあなり、あなやとれもふに、はや、もちとりにかゝれるなりけり、日頃かでのうちにやし

なはるゝに、やう／＼なれてけり、天地のうちには、かゝるかげもありけるものをとさへおもふをり／＼もありけり、一日おとりといふものにせられにけり、猶この、かふ人のこゝろの中をみあらはしてむとおもへど、かろ／＼しくはえすゝまざりけり、人あり、うたをうたひて過ぎゆく有りけり、其のうたをきけど、すなはち、「はつ枝にもちいをかけしか父をとらくをしらにしか母をとらくをしらに」となむうたひける、おもひあはすることさへありて、あさましくなりけり、かごのひまをうかゞひてにけむとすれど、ゆめはさめてにけり、其の男

ゆきなれし道こそよけれわたるまも
　　あやうかりにし夢のうきはし

となむ、よみたるとぞ。

第八　昔男ありけり。いつれの御時にかありけむ、上は下をはかり、しもはかみをしのぎて、いとみたりかはしきことおほかりけり。其の男かたくなゝるものなりければ、まじらひにくゝや思ひけむ、世をそむくとはなくて、山おくにいりにけり、ひるは雲のゆきゝを見て心をいため、よるは月のひかりをながめて涙をなむなかしける、月のかげうすかりける夜

風だちぬあめもふりこむ月かげの
　　かくろへぬまに窓さしてまし

となむうたひける。つゐておかしけれど、山靈きこしめしけむ、人あるとしもみえざりけるに。（おなこゝろよはのふるまひやとて、わらふ聲こたまにひゞきしとなむ。

第九　昔男ありけり。得うましかりける女にかたらひつきてけり、からうして盗みいてぬ、れいの如く暗らかりける夜なりけり、あくた川のほとりにもいかず、鬼ある所をもすぎず、かごしまにやいでゆかむ、山口にや身をかくさむ、高知やなほよかむなむとて、さま

ざまにれもふみたれにけり、雨もいたふふり、風もいみしうふきて、神さへれとろ〳〵しくなりとゝろきけり、一口にくひたりけむ、鬼もいでこず、夜もあけにけり、雨もやみ風もなごみてけれど、天の下は、あらたまりたるやうなりけり、空のみにしもあらず、をりにふれ時につけつゝ、かはりやすきはこれ人心なりけり、やう〳〵定まりては、あく所のなきにしもあらさむめり、始のちぎりは、わすれたるやうになむなりにける、ねうせずどうちもすてられぬべきさまなるに、時の人女にかはりて

やなくひをれひけむ世にはひきかへて、
　ふりかはりたる天の下かな

となむいひけるとぞ。女のこゝろの中やいかゝあるらむ、みかへされむ時もこそ。

武藏國號考

梅の屋老人

ムサシの國號の起れる由は、蓋、ムサイといふ邦俗の語が本にて、「ムサシをムサイといふ例は、譬ど、暖寒をアツイ、サムイと云ふが如く、其の他五色の類も、此暖寒の語格に準へてこそ思ひ悟るべけれ」果は、國の名ともなりけむかし。今の現にムサ某てふ俗語は遺りて有りけり、其の證は、ムサクロシ、ムサイ、ムソなどの類、擧て數ふるに遑あらず、凡て國號といふは、只淺はかに味氣なきものにて、始より胸刺國武藏國等の如く、六かしき字に因りて云へるに非ずかし。天孫降臨の地も、脊宍の空國といふ言の如く、此の國の始もかゝりけむかし、草莽の世に、武藏野の最廣らかに、荒びにあらびて、國形未だ治らず、謂はゆる、ムサクロシとも云ふべき形狀なりけれど、土俗のかく云ひなしけむも知るべからず、かゝる因縁にて、自然國の名に負

ひたらむも測りがたし、とにかくに、ムサシの語は、邦俗の心に、快からぬ眺めに就て云ひ出でたるが原由にて、遂に二十四郡に亘れる總名ともなりけるにや、かゝれど、國造本記に、胸刺國无邪志國と並べ擧たるにて、ムサシの語は胸刺より出でたりと云はむも知るべからず。如何となれど欽明天皇の宮の名を、カナサシノミヤとあるを、一にカナシノミヤとあるにて、彼の胸刺も此の類例に因りて、ムナサシのナを略きて、只ムサシと唱ひ始けむかし返〴〵もムサイといふ語の本にさかのぼらずして、徒に胸刺武藏等の字のみ執らへて、彼此云ひ喧ぐは學問の道に於て如何にぞや、抑、武藏の國號は、先哲學者の議論尤も夥しけれど、吾が輩の喙を容るべきにあらざるなり、いはんや、皇都となりてより、文華日々に開け往き、まに〳〵奇しく妙なる新説出來るからに、今かく生々に、筆のすさみに云ひ出らふは、世の議論を來し、罪を大方に得べき謂にて、かにかくに思ひ始たる言、默然しあらむも流石なめれど、今しかく一言云ひ試むるのみ、敢へて世の君子、予が痴説の罪を宥して、慇懃に敎ゆるあらむ、千慮一得の大幸ならめやも。

畫師

石榑青苔

都に一峰といへる畫師ありけり。妻はとくみまかりけれど、そが忘れ形見にて、ことし十五才なる少女英子を、他人の手にかくるがいとはしとて、たゞ獨にてくらしき。

若きをり、某の筆のあとをまねび、あらゆる流派に入りたゝずといふことなく、歷史の畫をかきても、風景のにても、をさをさ人の下にたゝず、春秋の美術展覧會にて、いつもめでのしるしを得ずといふことなかりき。されど今の世にはすぐれたる目もたる人なけれど

とて、つゆよろこばしき色も見えず、惡しざまに評する人ありても、腹立つさまもなかりき。

一峯、ある時、われは日本の畫師なり、いかで、日本の畫といふ畫かきて、外國人にも見せ、後の世にも殘さばやと思ひおこしぬ。さるにても、いかなるものをか撰むと、おもひわづらひてありしが、まづ、すぐれたるものより算ふれば、萬世一系の大御門、全國の風土山水、されど、いづれもみな筆の力の及ばざるもの、さはいへ、この二つをおきては、又何をか撰ばむ。さては山水の一つをえがくべきか、奇しきまでにめづらしきは、松島、天橋立、嚴島、古より三景とたゝへられつるほどありて、さすがに棄つべからず。敷島の大和心をよろへて、めでられたる櫻花をもて名ある嵐山、よしの山、これ、はたほこるべきところなり。されど、世界は廣し、なほこの上にいづるものなしといふべからず。よし上にはいでずとも、同じほどのものありては、口をしき限なり。あはれ〳〵、かきて世界の人々に見すべく、新聞雜誌の挿畫に、わが事畢れりとおもへる、えせ畫師の膽ひしぎつべきすぐれたる畫題遂になきか、あらでやは、あらでやは、さてもありけり、我が邦の姿をあらはせるもの。

支那四百余州を見てこし人にも、亞米利加、歐羅巴をめぐり遊びし人にも、いまだ似たりとだにきゝしことなき、惟一の富士の嶺、げにこれをおきては、わが日本にえがくべきものありともれぼえずと獨ごちぬ。いゆき憚るといひけむ雲の棚引ける、霞の間よりにほひこぼれたる、空には塵ばかりの雲もなく、朝日、夕日のはなやかにさしたる、ことに雨の霽れたるあとは、いつもあはれなり、殘るくまなく雪のふりつもれる、半なるも、たゞ巓にのみのこれるも、いつ、いづれ、時、處をわかず、けしきのすぐれたるは、いふも更なり。東西南北、前後左右同じさまに、四方八方いづこをわ

かず、表なければ、裏のあるべきやうなし。げにも國の鎭、仰げど、心自ら高く大きく、むかへど、身も自らすが〲しく、尊くさへぞおもふ、かどかりの山、他にあるべくもあらず。まこと、世に絶えてなき處。こを人にうつさど、直に、正しく、しかも、動かず、傾かぬ好丈夫、美夫人これを器物にすれど、完全無缺。こを國にすれど、萬世一系の帝統上にいまし、神代ながらの臣民下に立てるわが日本國。あはれ、この心をさながらゑがきいづべきは、わが日本畫師の本領にして、しかも、こよなき好材料。時は久し、人はた少なからず、この比ひなき山は、古今幾多の人の筆に上りぬ。されどこれだゝの山、いかで世界に二つとなき、くしびの山にくらぶべき。神とますみ山は、爲に悲しび、爲になきてぞあるべき。

畫にやまと風、漢風、洋風、さま〲あり。やまと畫又幾種あり、漢のも、洋のも、風により派により、幾品幾百種といふことをしらず。されど、たゞわづかに形姿をうつせるもの、中には見る人の心によりて、强ひてそれと定むるもののみ、その心をうつしいでゝ、あはれといはしむるもの、一つだにあることなし。或る歌人は、一首だにこの山のをどうたひいでざりきとか、蓋、劣らむことをおもひてならむ。いでや、われは、この難しと世にすてられたる、さらぬも、とても及ぶことを得ざる畫題をとりて、ゑがき出でむ。さるにても、この山にのぼりもしめぐりもして、事と筆そめつる畫師もありきとか、されどきこえたる畫なきをれもへど、われまた、同じさまに世のそしりをやうけむ、さどれ、なみ〱の流に沈みはてむこと、わが心にあらずとふるひ勇みて、筆とりそめつるぞを〻しき。かくれもひよりては、人よりいかにこはるとも、悉くいなみて顧みず。家のことさへわすれはてたるが如く、あるは雲霞の棚引けるさまをものし、あるは晴れわた



りたるさまをものし、すべて雪のかゝれるさま、鹿の子まだらなるさまをうつし、書きては破り、破りてはかき書きをへざるに早くひきさく聲きこゆ、さらぬも半日一日をとゞめず、同じやうなることのみして、遂には月日の過行くをもはたと打忘れ、少女がすゝむるに、あゝ又してもと歎きつゝ、せむかたなく膳に向ふ。少女はかひ〴〵しく家のことゝりまかなひて、何くれと思ひわづらへり。

畫師は美術家なり、むさきはふさはしからずとて、衣、もちものとり〴〵にきらをつくし、ふさ〳〵と黒き髪はにはひわたり、わたりまでゆきでかりなる姿やいづら、鬢髪は蓬生の如く、おどろ〳〵しう生ひみだれ、衣に染みし垢は漆の如く光り、面やせたるに眼のみきらめきたる、いづこいかなる鬼の島よりいで來にけむと疑はる。少女はやさしげに、衣めしかへ給へ、髪をさめ給ひてはとすゝむれど、うるさしと叱られ、さる料あらむ絹地買ひて得させよといふ。さても、今はこの少女なかりせば、この家片時だにもたつべくもあらず、志を半途に空しくせさせ奉らじとおもへど、父よりも一きはつとめいそしみ、さらに世のあだなる姿を顧みむともせざるぞいぢらしき。父は父なり、子をおもふ道には誰も迷ふといふを、しかも親愛しき妻がわすれがたみの一人子、いかで其の心根をしらざらむ。同じ女子に生れながら、花のさかりもとく徒らに過ぐさするいとほしさ、ことに幼き折より、男手一つに養はれ、世の少女子は母の膝によりかゝりて、あれよ、これよと物好みする年頃より、世わたりの風雨にあはせ、婢一人だにおつかはずなりし身の、水仕わざに手足もあれ、見るもあはれなる姿となりしをで、いかにかこちてあるならむ。さるのみか、人なみの世なりせでさるべき聟をえらび、子の幾人もある盛の身を、あたらむなしく過ぐさするくるしさ、こはみなわが好奇心よ

りれてりしてと、幸なき身とあきらめてよ、ふがひなき親とゆるしてよと、心の中には手を合はす折もありしが、さりとては心よはし、わが目的にはかへられず、まゝよ、かなしきわが子を犠牲にしてなりともとおもひかへしつゝ、又齎絹にむかふ。くさ〳〵の繪の具は、其のあつき涙にとかれたりしなるべし。

いつしか鬢髪に白き筋をまじへ、こゝにいくらの春秋を過ぐしけむ、一個の老翁は、丹青の配合、濃淡のとりあはせ、風をれこし雲をれこすべきさまに、まこと神のいますが如く成りあがりたる富士の畫を、あるはれき、あるはかけ、右にゐ、左にたち、瞳をこらして見てありしが、今ははじめてこゝろに許しゝ畫はなりぬ、英子よ英子よと手をうちてよろこびしまゝ仆れふしぬ。莞爾やかなる笑靨は、わづかにこの世の名殘をとゞめて、又いふ言もなし。

其の秋、美術展覧會は忍が岡にひらかれぬ。幾千百枚の繪畫、すべて見るに足らず。さるを、日々につどふ人山の如きは、中にすぐれて秀でし富士の畫あるによりてぞかし。ゑもこの畫や、形のみの富士にあらず、見る人の心より、強ひて思ひ定むる富士にもあらず、打見るさまの風景をうつしたるのみの富士にもあらで、心の美をうつしいで、日本の國の鎮となれる富士、げに古今獨歩、末の代かけて、又出來まじき筆。これぞまことに日本畫師の開山よと、めでただふる事天下にひゞきわたりぬ。さても、今は地下なる一峯の心に叶へりや、あらずや。觀れば、某の一女英子出品とありて、畫面の名と同じ水莖のあとにて、ひら〳〵と風に流れたる傍の札には、筆太くあざやかにかける四文字、曰く。不要審査。

東京二十四景（一）

草の屋主人

上野公園

花や、紅葉や、月や、雪、いづれをわかず、おもしろきは、上野公園のけしきなめり。朝日夕日の日でる九重の玉しく宮居より、東北ざまにわたりて、都の片隅に横はりふせる丘陵にして、いとふるくは、忍が岡となむよべりし所なる。

東は淺草の千衢を越ゑて、はるかに、むかし男がことゝへる都鳥のわたりを、霞がくれに見わたし、北の裾には、吳竹の根岸の里は、音無川の水もしづかにすみわたり、谷中の里を隔てゝは、近く道灌山より遠く飛鳥の山べにうちつゞき、西の裾には、岸うつ波も玉とくだくる不忍池を隔てゝ、綠の袂もやさしげなる向が岡にうちむかへるなど、うちわたす四方



の眺めも、おもしろく見るに、丘のべのけしきは、また、折りふし去らず、あはれなり。

花には、清水堂の邊りなる彼岸櫻を、いつもさきがけに、おくれじ劣らじと咲き出で丶、うららかなる春風に、こ丶もかしこもかをらぬくまなくにほひこぼるれば、山ながら花にもなるとおぼえ、見る袖も心も、紅に染まるばかりの心地して、いふばかりなくおかしきに、都の人のうかれ出で丶今樣うたうぶき、猿樂ふるまひ、躍りゆき、狂ひ遊ぶさまも、また、をりふしの興ならむ。

ほづ枝、はづゑ、緑ふかむる夏木立、ものふりにたる松杉の老木がくれは、流る丶水はわらねども、夏も、秋の、心やすみわたるらむ。

月は、夕かせに露の玉ちる木のまがくれの月、奥ゆかしう身にしむものなるに、ちかく不忍の池のへの金波なすをうち見るも、千金の眺めなるべく、見晴臺邊に立ちて、都の大路小路、千衢八千衢にたちならびたる瓦てりかゞやくをうちわたすも、みやびはあらねど、一わたりは、めづらかなるながめならむ。

紅葉は、清水堂の邊りの丘のへなるが、朝日夕日に錦を洒したるやうに見るより、松杉常磐木のかくれに、こ丶かしこ、淡く濃く染めて見る紅も、ふりはへてきてみまほしきながめなりけり。

雪は、山ながら、時ならぬ花は、いふまでもあらず、玉しく都の名は、これよりかとぞかり見わたさる丶もあはれにおかしきながめならむ。かぞふれど、をりふしのけしき、皆ながらこ丶は捨てがたし。

景色にはあらねども、動物園に鳥けものの振舞を見、博物館に廣き世の物の美を見、東照宮の社に、彰義隊の塚のへに、むかしのことしのぶも、また、あはれならずやは。

村雲（その五）

白魚女史

思ひの空の晴れんとすれど、また新しき雲霧のかゝり來て、かき亂るゝ病の床のべに起き直りて、糸のやふなれる指を、くりかへし折り數へつゝ、靜子、あなおぼつかな、おぼつかな、思へば、いぶかしくもおもはるゝ。姉上樣。などかく久しうは見え玉はぬ。如何に事のいそぎに、たちぬひ仕事に追はれ給へばとて、さばかりの姉上が、かばかりも久しう、そよとだにおとずれ玉はぬ事の、たゞにはおぼえじ。おぼえじ。やふなくおぼえじ。もしは、もしや、わずらひてにはおはさぬか。ゆめもらしたる覺えはあらねば、我が心のにごり、御心さとき姉さまの、いつかいづくにか汲み玉ひて、わざと結ぶべき人の袂をゆづらんとはし玉ひて、さすがに、心地のわづらひ玉ふにはおはさでか。母樣、母樣、母樣さへに、見へ玉はぬは、如何遊ばされてか。此の二日三日、誰れに尋ねても、仕事せられて、いそがしくとのみきけば、さても、朝夕露ばかりのおんとぶらひは。それさへあらぬは。思へば、げにげにいつぞや姉上はとたづねまゐらせたる折り、さうなくつと立ち玉ひしを限り、見え玉はずなりたるはっ思へば、もの思はるゝかな。あな何の霧、何の霞の、かくはふたがりてならん、さても現か夢か、はたまぼろしなるか今日此の頃のあやしき世、わかぬ世、さても何の世ならん、姉上、姉上、見え玉ひてよ。この思ひの雲はらさせ玉ひてよ。今一度、のう姉上樣、此の度は必ずずゝ露はかけじ、涙は見せじ、のう姉上樣、姉上樣、御聲なりときかせて玉へ。まさかに、我が上の思ひ、知ろしめされてにはれはさめれど、あまりに包みまゐらせし故に、すげなくも、憎くも、うらみにも思ぼしめして、さばかりにうとうとしくへだてにもなり玉ふにてか、姉上樣、今は思ひも迷ひもはれ侍りぬ。のう





きのふけふは忘れにたり。姉上樣、見すて玉はで今一度とむかり、今は、靜子は他の思ひも消えはて丶、ただ姉の事のみ心にかゝり、枕を柱に病の床に起き直りて、やよ、誰かある。來ずや、見えずや、姉上樣に言傳てよ、來ますやうにと云へども、答ふる人も音もなし。思ひよわりて、はては、ふし沈みたるまゝ、ものいふべき氣力もなく、たゞもだえくるしみたるが、ほとほとと音して、ろう下に聴ゆる人のけはひ、何となう姉のやうにおぼゆるに　あなうれしとむかり、とみにいさみて、久しやとむかりはひ出で丶、障子あくれど、かげも人も見えず、たゞ桐の葉のはら〳〵と風に音たて丶散るのみ。靜子は、さらぬだに力なき身体、心も氣もおちはて丶、そのまゝ臥し沈むに、たゞならぬ風の音、ふと見上ぐれど、ひら〳〵となぎりかゝれる雲のはたて、やがて、はら〳〵と軒にふりかゝる一むらさめ、亂れかゝるけしきに、いよ〳〵胸のみとゞろかれて、とゞめても〳〵とゞめもたきに、かくて思はんよりと云ひながら、明りし障子を杖に、ふら〳〵と立ち上りて、やう〳〵に姉の部屋までたどりつき、靜が來りたり。姉上樣。あな重きふすまや。あかねに、姉上、あけ玉ひてとて、聲かけつゝ、己れもあけんとすれど、あかず。姉上樣、姉上樣、あけてよ、靜が參りたるなり。あけてよと呼べどもよべども、答へとてはなけれど、なほ二聲三聲、息をかぎりに呼べどたえて答へなし。あな姉上樣。さては正しうわづらひておはすか。靜は、はやようなりにたり、ゆめもゆめもよしなき事思ひわづらひしには侍らず。姉上樣、此處へは來にたり。御心安う思ばしてよと、やうやくに襖引あくれど、こはろも如何に。人は影もなし。昨日けふ迷ひの去りたる靜子は、もしや姉がわづらひ居らむ必ず〳〵妾故ならんに、早うとさも結びもなしまゐらせてんとむかり思ひてこ來りたるに、人さへ見へぬに一入心もき

ね入りて、生體もなげに仆れたるが、つく〴〵とめぐらせど、誠に人の云ふ如く彼の事をとり急ぎて、母様ともろともに、れ部屋に裁縫してなるか、さては、いかにして、姉上様は日來にも似ぬさる御心をうつし玉ひしならん。いぶかしや、さては、自らが心をそれと汲み玉ひて、わらはふびんにればしての御心にか。さらんには、かくてはわられじ。かくては妾がわられじ、さらど自らがてゞみて、父上の結びつけ給ひたるゑにし、何處までも結ぼせまゐらせでは、父上に對しまつりても、妾が事すまじとぞかり、また、とつかは思ひ立ちて、風に失はれし糸柳のふるふ足もとを、辛うじてふみしめて、たどりつきたる母の部屋、障子にまろびかゝりて、靜が參りたり、姉上様が見ねてならんといへど、わな靜か、よき處てそ、母が諸共につれだゝん。まづ此方へ參れとて、襖押しわけて導き給ふに、必ず此處ぞと思ひたる姉は、影も見ねず。案に變りたる部屋のさま。靜子は、いよ〳〵ればつかなく、つく〴〵と母親の顔うち守れど、僅のほどに變りにかはりたるけしきさへ見ねて、むねのみとゞろかるゝを、やう〳〵しづめて、姉上が見ね給はぬか何處へかれはしたると、いぶかしみながらも、さすがに、なほわるとのみ思ひて、尋ぬる靜子を、母親はうち守り、はてははら〳〵と涙にさへなりて、靜や驚きな、その姉は母が殺しぬ。さ、さ、驚きてならん〳〵。汝故に。殺さんと思ふ心は、つゆなくて、わが手にもかけしにはわらねど、やがて母が殺しぬ殺しぬ。その申しわけに、母も今死なんと思ふなり。死にてならくの底にしづみはてんとは思ふなり。のう、靜。そち故ぞ。汝も覺期せよ。ろちも姉殺し、伯母御が嘸や口惜ううらみて、うらみてましまさん。日來より、夫の子、姉の子、妾は姉の影なれど、妾にも子、ゆめ〳〵まゝしき心はいつかれこさんとは思ひしものを。ろちが一方ならぬも

の思ひ、目のあたりかなしき子の消えんずるを見るがかなしさに迷ひて、はからずも狂ふ心の掟、わが心故に、いつか大事の〳〵姉娘を殺しぬ殺しぬ。此の母は子殺し、子殺し。思へば思へば、深き因果。必ず先きつ世に犯しゝ罪のふかゝりけむを、また〳〵此の世にて子を殺すといふ非道の罪を重ねて、來世はいかならん針の山火の谷、如何ならん地獄ぞ。のう靜、此の母は早うならくの底におちて、罪のある限り、火ぜめ、水ぜめ、やりぜめ、油ぜめ、せめられて、罪亡ぼさん覺期、いとほしかれども、ろちものがれぬ罪もろともにおちよ。のう〳〵、靜、靜。はや息たえてか。可愛や〳〵、あるべからざる物思ひと思へど、さすがに、かゝかりわづろふまでにさへなりけるを、此の母が夢のはしの言の葉に、松丸にこがるゝと云ふ事を知れるが、思へば惡魔。助くべからざるものを助けむとて、殺すべからざるものを殺すやうの身とはなりぬ。ゆるしてよ〳〵と前後も知らず抱きあげ抱きかゝへて、泣きかなしむに、靜子はふつと目を見ひらき。さては〳〵、姉上樣はいかにか遊ばされてか。ゆるしてよ〳〵、姉上樣。煙となりて消えなん後にも、つゆさる心ありしとはかゝりは知られじと、包みに包みしものを。いつもらしけん。口惜しや〳〵。はづかしや〳〵、兄上樣、松丸樣、大事の〳〵姉上をば亡くなし參らせて、嘸かし我が身が憎くからん。淺ましとも何とも申すやうのなき此の身。兄上樣がいつぞや學びの道をふみとげたまひてめでたく歸らせ給へる折り、靜よ〳〵とよにもやさしうしたまへるが何となうゆかしう覺へ奉りしが、などあのやうの忘られぬ心にはなりしならん。はづかしや母樣殺し給ひてよ、殺し給ひてよ。母樣には何の罪もあらじ。自らがわろきなり。はづかしや、母樣早う殺してよ。母樣は必ずながらへてよ、さるにても不孝者、己の先き立つは數ならぬ不孝、やさ

しきやさしきかしこきあの姉様を殺してく〳〵、母様の杖をも柱をもいたづらに亡くしたる不孝者、不悌もの、ようも〳〵此のやうなる大逆人とはなりけむ。母様もはや、子とも靜とも思召さず、鬼とも蛇ともればしはて、疾く〳〵捨て玉へ、殺してよ殺して道のほとりに捨て玉へ、烏に狐にかませも、くはせもさせ玉へ、返す〳〵も口惜、やさしうれはしたる姉上を殺しまゐらせしが口惜。口惜。姉上かくて、われの片時、かくてあるべき心なしとて、早掌を合せ目をさへつぶるに、惡業の子に報ふとはかゝる事。靜子、さらでかひなき母もちてと、あきらめても給へ。恨みでよ。母もやがてゆかむ。ならくの苦しみ、たすくべきほどは助けんが、せめての思ひ出でともかりにたきなす涙を、やう〳〵にさうの袂にうち拂ひ、傍なる短刀取りあくれぞ、いづくにか母様と呼ぶ聲。何となう姉娘に似たる聲れぞろきて、見かへりしが、いかで亡くなりたるものが。心の迷ひとまたも取りあぐる短刀、雨も嵐もふきすさび木の葉あやうき秋のくれ、鳴く雁がねの聲さむし。





文林

市中梅雨　　東久世通禧

しろがねの名におふ市の柳かげ
暗くしげりてさみだれのふる

夏雲　　近衛忠煕

足びきのやまより上にみねをさす
くもこそ夏のしるしなりけれ

里卯花　　佐々木高行

むすびたる縄は朽にししづか家の
垣根をかこふさとの卯のはな

樹陰螢　　鍋島直大

我が園の木立ち隠れにかすかにも
ひかりを見せて飛ぶほたる哉

待郭公　　高崎正風

いつよりも今年は遅しほとゝぎす
待たで聞きつる夏もありしを

夏月　　池田茂政

大ぞらはまだきにあきの通ふらん
ひかり涼しきつきのかけかな

曉郭公　　壬生基修

郭公たかねのまつになきすてし
こゑよりしらむありあけの月

螢　　長谷信成

夏ひきのいとのよるよる池みつに
かげみたれてもとぶほたる哉

渡水鶏　　小出粲

草深きのがはのわたりふねはあれど
人かげたえてくひななくなり

渓雲　　遠山英一

谷底におりゐるみれどうきくも丶
沈むこそわるよにこそありけれ

高崎大人よりこのほど紀州の古屋谷よりもたらしたまへる石をたまはりけるにその形よく遠山に似たれどかりに遠山となつけて

仝　人

わさもよし紀の遠山をぶづくゑの
す丶りの海のれきに見るかな

首夏雨　諏防忠元

夏のきてわがむにそ丶く雨の音も
まだ涼しとはきかれざりけり

夏草　宮地嚴夫

秋た丶む千ぐさの花もさきいでん
のべのみどりのなつかしき哉

海邊郭公　北郷久政

いさりふね沖へはるかに見渡せは
洲さきの松に鳴くほと丶きす

夕立　三浦千春

ふじのねに雪は見えながらかき曇り
ゆふだつ雲のうきしまがはら

五月雨　林甕臣

この儘に晴れずなりぬる空かとも
あふかる丶かなさみだれの雨

江菖蒲　伊東祐賢

難波江のなぎさにさけるあやめ草
浮きしづみても見ゆる頃かな

紫陽花　三輪義方

けさみれど赤ねさしけりきのふ迄
みどりなりつる紫陽花のはな

中州岡田亭に遊びて主の刀自に贈るとて　龜谷行

隅田川さくらはちれどはるかぜに
ゆかしきものは柳なりけり

美人の書に　木庭芳香

つまれぬは野邊の若草わきしらで
かはらぬ春のはなのれもかげ

六月大祓　安齋篤敬

御祓する河の瀬見れどいつのまに
たもとすゞしき秋やきぬらん

阿女　佐々豊水

姫か名は木のめのかをり香はしく
千代萬代もしたはさらめや

荒木田麗女　仝人

いせのうみやきよき汀のきよらけく
ゆかしき名こそ世に殘りけり

首夏　松本操

夏ざれどにはの若葉のかげくらく
ふみ見る窓にねぶりけるかな

新竹　石原均

人もかくあらまほしきは竹の子の
千尋のかけをおやにならひて

撫子　黒崎仙太郎

我がやどのにはの撫子けさ見れど
なつかしきまで露ぞこぼる

尋見花　鈴木伊摩吉

山ふかく尋ねてや見んさくらばな
たきゞにろへてかへる杣びと

樹陰水　鍋島榮子

陰ふかき大木のもとにたちよれど
すゞしくすめる水もありけり

田上螢　前田朗子

夜やふけし賤が門田にかすそひて
ひかりさびしく飛ぶほたる哉

庭卯花　西四辻茂子

わがやどの庭の卯の花さきしより

日のくれれそく思ひけるかな

夏簾　柳原愛子

新らしくかけ渡したるたまだれの
をすのいろこそ涼しかりけれ

衣　税所敦子

たらちねのはゝのいまさむ賜物の
綾のみけしもきせましものを

竹風　小池道子

呉竹のはずゑのつゆのちるみれば
たえせぬ風もすゞしかりけり

竹亭夏月　北島以登子

おく露のひかりもそひて夏の夜の
月かげすゞしたけのえだには

郭公　鶴久子

ほとゝぎすなかぬ年かと思ひしに
きゝつとかたる人もありけり

ほとゝぎすいま一聲とおもふまに
かげさへみえずなりにける哉

郭公遥　遠山いね子

月前水鶏　保科節子

月きよみ夜すがらさゝぬ門の戸を
なにゝ水鶏のたゝくなるらん

窓前螢　岩崎寧子

集めけんむかしの影もおもほえて
ふみよむ窓に飛ぶほたるかな

池梅雨　原田蒼生子

梅雨にみづますいけのあやめぐさ
たけみじかくも見えわたる哉

海軍擴張　梅津萬壽美子

北の海にむすぶ氷のとけぬまに
みいくさぶねはますべかり鳬

朝春雨　諏訪晴子

ぬばだまのゆめこゝちよく春雨の
れとをきゝつゝ朝いしてけり

螢似玉　田邊和氣子

いは間より流るゝたきの白いとに
つながぬ玉やわたるなるらむ

橘　安齋美代子

時鳥しのびねになくわしたより
はなたちばなも香に匂ひつゝ

親　久後鈴子

うきことにあふもいとはず親心
子のさきはひを祈りけるかな

子　仝人

こひしたふをさなきときの心もて
千代もわすれず親につかへよ

述懐　鹽井ふく子

天津日の照さぬ世にはさてもあれ
いつまで露を玉と見るべき

落花　鹽井きく子

夕まぐれ吹きまく花のうらかぜに
鐘のねしろしいそのふるでら

澤菖蒲　師岡須賀子

軒にふくあとはたゑてもあやめ草
なほさはにひく人はありけり

小學校開校式唱歌

東宮鐵眞呂

第一

親のなさけに生ひ出でし　世のなでし子を移し植ゑ
わさな夕なにつちかひて　やがては里のひかりとも
なりなん花を咲かすべき　をしへの庭はひらけたり
いはへわがとももろ聲に　うたへわがとももろ聲に

第二

君のめぐみにうるほひて　日に育ちゆくなでし子を
朝な夕なにつちかひて　つひには國のもとゐとも
なりなん實をも結ぶべき　まなびのみちは開けたり
いはへわがとももろ聲に　うたへわがとももろ聲に

六月大祓

橘　冬照

中臣の、天津いはひの、ふとのりと、まをし給ひて、川の瀬に、身そきてしより、高山の、みねのいほりを、朝風の、はらふかことく、短山の、ふもとの霧を、夕風の、誘ふか如く、罪といふ、つみはしそけて、靜すけの、すか〳〵しくも、わか身はなりぬ。

暮春の詞

瑞ほのや主人

花染め衣いつしかとあせ果てゝ、霞の袖の夢の間にうつろひぬ。春や樂しと、梢はなれず歌ひ暮しゝ鶯さへ、ま遠になりぬるを、春のとじめと咲きにほひし、藤、つつじなどの、ちり方になりぬるもかなし。あはれ今よりは、只、となりにしらぬ卯の花月夜に、山ほとゝぎすの一聲をのみ、まちいろがるゝよなど、ひとりごつ折しも、窓の若葉、一しきり風たちわたりて、葉末の露のほろ〳〵と、こぼれあふ樣いひしらず、おかしかりければ

木にはまだうらわかけれど白露も
　やどりがてにやちらんとすらん

五月雨

ちまた

をやみなき五月雨、日數ふるまゝに、名におふすみだ川も濁りふかく、水かさはまさりて、鐵の橋もうかせむ斗なりにたれど、岸の青葉に花の面かげなつかしむ人もなく、橋場今戸の渡守も、堤のふせやに空しく無聊をかこつめり。

絃歌の聲わくが如くきこゆるは、つれ〲なるあまりに、富める若人等が、さしこめたる品定にもあきて、物忌ならぬ身の打つれて、たをやかなる舞妓にうかれ遊べるなりけり、山海の珍味は百とりの机になめすゑたれど、飽ける身にはうましとはむる人もなし。さるにても、つゞれの衣のぬれたるを着、すあしのまゝにろの門にたてる子どものあはれさよ、たちよりてきけば、母はとくうせ、父は軒端かたむきて、もらぬ方もなき裏屋にすまひ、常は形ばかりの物ならぶる緣日商人、日くるれば店をひらきて、跡たゆるまで露にぬれ、星かげうすれゆく頃歸りて、得つる金子は、わづかに父子の命をつなぐのみ。さるにても、今日此の頃のやうにふりつゞきては、商にいづることもならず、家にゐてくらせば、多からぬ資本のものまで食ひ盡して、のこる處なし。さるのみか年老いたる身は、絶ねず病にかゝり、日比枕につけるを、兄弟して看護せまほしければ、さては皆餓ゑなむほどに、互にかはりて、一人の出てゝ食を乞ふ時は、一人は止まりて守れり、良醫に見せまほしけれど、藥の料なく、美味すゝめまほしけれど、金子めぐまるゝ人少なきのみか、中々に乞食は御掟のゆるさぬ處と叱りつけらるとか。あはれ五月雨は必あるべく、なくては叶はぬものなるを、日頃より其の用意せずてとな咎めぞ、貧しきものはさることはりのものにあらず。

さるにても、かのうかれ遊ぶために、この大川を流すが如く費す金子の、千々の一つももらさましかば、救ひ得られなむを、杜鵑ならで貧民の血に叫ぶ聲、いささか耳傾けよかし。さるあはれなる貧しき民は、たゞ一人二人にはあらず、この川の水かさまさるとともに、かの絃歌の聲ならで、いよゝさはになりゆかむものぞ。

活版

女子高等師範學校　三年生　金岩かをり

わか名を呼ひたまふは、祖父のみこゝろなり。讀みさしたる文をかたへにおしやりて、いろぎまゐる。今し書を曝さんとおもへど、しばしの間助けよとのたまふ。かしこまりて、そこにある書ども、とりいだし、あるは、繩をはへてうちかけ、あるは、むしろの上にひろげなとす。紙のいろ墨のいろのけぢめ見はわかぬばかりに、すゝけたるあり。ところ／＼虫くひ、やれそこなひたるもおほかり。祖父の君は、表紙などそこなひたるを取りわけたまひ、うちかへし／＼尊げに見たまひ、おのれをかへりみてのたまふやう、こは、わが若かりし時に、世に得がたかりし書にして、たゞ我が君の一部もたまへりしのみなりき。おのれ讀書に志ふかゝりしかば、常に君の御前にて、御書の講義つかまつりしを、或る時、特に拔きいでられて、そこらの人の前にて講じたる事あり。そが賞として、かの御書を貸したまひしを、夜晝心をこらして寫したるものなり。いまはかくふるびたれども、いみじく心をくだきしものなれば、萬の寶にもまさりて愛せらるゝは此の書にこそ。とて打ちも置きたまはず。なつかしみたまふ。かくいふは、去年の夏、休業のをりふるさとにての事なり。明治の大御代のみめぐみは、限りもしらず、數へもつくしがたけれど、そがかたはしとして、こゝにあげんとするは、活版事業の進みし事なり。

われいまかたはらをかへりみれど、文學、理學、工藝、美術ありとある道々の書ども、そなはらずといふ事なし。こを盡く手寫せんか、數多の年月と、そこらの勞苦とは、たゞいたづらに費ゆべし。さらば一歩進みて、版木にのぼせんか、それはた幾多の月日と、多くの費用とを要するは、まぬかるべからず。さるを此の活版を用ゐる時は、千萬の紙數なりとも、たゞ時の間

に摺り出すことを得て、その時間を省く事は更にいふべくもあらず。したがひて價もまた廉なるは、ことをまたず。されどいまは、和、漢、洋の書籍をはじめて、新聞雑誌より、布告布達の類に至るまで、こを用ゐずといふ事なし。かゝる業ありてこそ、そこらの文どもも、世にあまねく流布するなれ。あはれかゝる業の世になかりせば、善き説を持し、あらたなる發明をし、優れたる文をあらはしたりとて、いかで世に廣め、人を益する事を得んや。まして學の道にたよりなき事は、更にもいはじ。世のひらくるとゝもに、人事の日に月に、繁忙となりゆく今日、一時、一分を惜みても足らざるを、一巻の書をみんとては、手寫に時を費すごときことあらんには、何の用にか立つべき。

我が祖父の若くておはしゝ時などは、いまだ此の業の進まざりしかど、去年のものがたりのごと、大部の書ども、うつし持ちたまへるがあまたあり。その勞いかばかりなりけん。彼これをおもひくらぶれば、いまの世の人の幸福幾何ぞや。これみな大御代のみめぐみとこそいふべけれ。

されど、わが祖父の常にいひたまへるは、いまの世の人は書を得る事かたからねど、書を大事と心得たる人すくなく、重んじてもてあつかふものなし。また苦學といふ事を知らず。苦學せざれば、業のすゝむ事なし。されどなほ手づから寫したるかた、まさるふしもあるにや。とのたまふ。ことわりはたなきにしもあらず。されど、そは、その人の心得の違へるにて、あながちに活版の罪にきすべきにはあらざるべし。たゞ活版は、その文字のかどありて、なつかしくやさしき節なく、みるまゝに品高く、尊はるゝごとき事のなきは、あかぬ心地すめれど、表あれど裏あるは物のならひなれど、これもまたせんかたなしや。

このたび活版といふ文題たまはりたるにつけて、日ごろおもひし事どもこゝにかきつく。

雜報

●皇后陛下華族女學校行啓

皇后陛下には、去る三日華族女學校へ行啓遊ばされたり、當日同校にては掛り員早朝より出校して御待受けの準備を爲し、時刻前には各級女生徒美々しく粧ひて、敎員と共に玄關前兩側に整列して　臨御を迎へ奉り　陛下には午前九時出門、高倉典侍御陪乘香川大夫、山内書記官、森長侍醫、女官數名の供奉にて、九時三十分同校へ着御あらせらる。此の時校長細川潤次郎氏職員と共に御車寄に奉迎し、御休憩所に於て御小憩あり、此間、校長より、本校職員名簿、生徒幼兒名簿、第十一學年事業時間表等を奉呈し、同校職員高等官に拜謁を賜り、夫より校長御先導にて、各講堂を御巡回在らせられ、各級の修身、國文、地理、算術外國語、裁縫、圖畫、唱歌、体操等親しく御覽ありて、午後二時過御還啓遊ばされたり。

●皇后陛下上野行啓及令旨

本月八日、日本赤十字社戰後臨時總會兼第八回總會を上野舊博覽會場にて開かれたり、兼て仰せ出されたる如く
皇后陛下には、一時三十分御出門にて會場に御臨御あらせられ、左の令旨を下し給へり

本日赤十字社第八回の總會に臨み各員を見るを喜ぶ殊に二十七八年の事件に際し能く其功を奏し爾來益々社業の盛大に赴くは滿足の至りなり

當日は畏くも　皇后陛下の行啓仰出されし事とて、全國各府縣、正社員贊助員特別社員の來集夥しく、朝來雨天なりしにも係はらず、午前七時頃より東西南北より詰かゝる者引もきらず、定刻前既に千を以て數ふるに至る、會場は商品陳列所及び明治美術會列品館と

を借り切りて、猶其の狹隘を告ぐる程なりき、同九時三十分一同式場に參列す、式場は南面して壇を築き、紅白の幔幕を以て覆ひたる中央には玉座を設け、背後には金屛風を建て廻はし、其左側には幾種の挿花美々しく飾立てられたり、同時刻　小松總裁宮殿下には、御息所及び同若宮とも玉座の階上に臨み、佐野社長、花房男爵、石黑男爵等と共に自ら諸般の準備の指揮を執り給ふ、軈て午前十時劉喨たる奏樂の響と共に　陛下の御着を報ずるや、社長始め一同は式場入口に奉迎し、總裁宮殿下御先導にて社員整列の中央を通御、階上の玉座に着かせ給ふ。

記するも恐れ多き事なるが、今日の御服裝は、淡紅色の御洋服にて、小松宮御息所及び同若宮は　陛下の左右に侍し、香川皇后宮大夫及び女官數名は御後に起立す、偖て佐野社長は、恭しく報告書其の他の書類を上り、且つ本社の現況を奏上す、　陛下は起て令旨を手にし御聲朗かに讀み上げさせ給ひ、之を總裁宮殿下に渡したまへば、殿下また音吐爽快に答辭を讀み上げ給ふ、次に社長は、階の一段低き處に起ちて、前二週年間の事務會計及び戰時事業の成績を報告し、且つ今回は本社役員の改選期なるも、戰時救護の殘務未だ全く結了せざるを以て、社則第十六條第四項によりて、次回まで其任を繼續せしむる事を述べたり。さて總裁の答詞は左の如し

總裁殿下奉呈の答詞

本日戰後の總會に當り
陛下の親臨を辱ふし殊に優渥なる令旨を賜ふ社員の光榮なり本社は創業以來
陛下特殊の恩眷に依り社業駸々として其步を進め遂に廿七八年の戰役に於て聊か我報國恤兵の主義を貫施するを得たり但成蹟微にして聖眷の萬一に報ひず誠に慙惶に堪へずと雖今や社員二十余萬あり一致協力益々社旨の普及に勉め他日有事の日に於て大に實効を擧げん事を期す社員に代り謹で答詞を上る

此の日總會の席に列せし俳人春秋庵幹雄宗匠の即吟なりと云ふは

六月八日赤十字社第八回戰後の總會につらなりて親しく后の宮陛下の御令旨を辱うす

幹雄

思ひきや玉の御聲のかすかにも
　みゝに入るべき事しありとは

●皇太子殿下の御參内　同殿下には、去る十三日午後一時御參内　天皇皇后兩陛下に御對顏、夫より宮城内なる靜寧館へ御立寄あらせられ、皇宮警部、警手を初め、各警察署警部巡査及び憲兵等の、擊劍試合等を御覽あらせられたり。

●泰宮殿下の御參拜と御對顏　先月十一日御降誕あらせられたる皇女泰宮聰子殿下は、去る十日午前十時、宮內省より差廻されたる御馬車に召させられ、御乳母及御養育掛林子爵御陪乘、園小梢典侍、外女官三名、式部官三名供奉、青山御產所より宮城に詣り、賢所に御參拜ありたり、御祭典は同九時より先づ御殿の御裝飾を奉仕し、式部官着床奏樂開扉神饌を供し、次に祝詞を奉讀し、玉串及び御鈴を供し奉り、此の間に於て聰子內親王殿下、林子爵以下御參拜あり、右終りて神饌を撤し、再び奏樂閉扉し、順次御退出相成りたり、又內親王は十時三十分、鳳凰の間に於て　天皇　皇后兩陛下に御對顏あらせられ、同四十五分御退出直ちに麻布市兵衛町なる御用邸、即ち同宮御殿に御移轉あらせられたり。

●螢の獻上　江州石山法輪院住職日野西道應師は、宮中に螢を獻上せんとて、特に美麗なる螢籠を製し、之に同地の螢數萬を盛り、去十二日特別荷物となし東京に奉送したりとなん、螢も亦榮と云ふべし。

●故兩殿下紀念郵便切手の發行　征淸の師起りて民心一致、上下擧て君國に報ずるの時至れるを喜ぶ、我

が同胞幾多の士は、勇奮して軍に赴き、潔よく殉難奉公の忠節を盡せしもの最と多し、就中、有栖川宮熾仁親王殿下は、大纛の下に在りて參畫の任を盡し、深籌遠謀の績、比ぶるものもなかりしに、一朝疾を得させられ、金革戢まらず、敵未だ降らざるに先だちて天上し給ひしは、我が同胞の哀慟悲泣忍ぶ能はざる所にして、殿下の御心事察し奉るだに、畏れ多き事なり。幾くならずして又、北白川宮能久親王殿下も、征匪の大任を帶びせられ、蠻夷の境に入りて剿誅を親らしたまひけるうち、端なく瘴癘の氣に冒されたまひて、御凱旋後間もなく、長夜の臺に赴かせ給ふ。就れも金枝玉葉の尊き御身を以て、邦家の難に先んじ給ふも、畏れ多き次第なるが右に付、其の筋に於ては、豫て故兩殿下の御紀念の爲め、一は、また、戰捷紀念の趣旨を以て、國民が一般に使用する郵便切手に、兩殿下の御傳影を描畫したるものを發行せんとの計畫にて、先頃より大藏省印刷局にれいて製造に着手中のところ、昨今全く出來上りたるに付、去る十二日、白根遞信大臣には、鈴木次官以下二三の高等官を引具し、印刷局に赴き、親しく右新造の切手を閲覽したる由、聞く所によれば右の切手は頗る意匠を凝らし、彩畫もまた精細巧緻にして、極めて見事に出來上りゐる趣にて、畏くも天皇陛下大纛を廣島に進めさせ給ひたる當日、即ち九月十二日より發行するものなりと云ふ。

●華頂宮殿下小學生徒を愛し給ふ　去る二日、松島濟遠兩艦の高知縣須崎港に碇泊するや、須崎尋常小學校生徒は、翌三日、同地海濱に於て、坪井司令長官一行を待受け、坪井將軍の演說を靜聽して、後一同八艘の小舟に打乘り、敎員八名之を監督し、松嶋艦に赴きて艦內を縱覽しけるが、茲に特筆すべきは、同日尋常科一年女生某階段を昇る途端に、先行某生の足、その鼻に觸れ出血するに至りしより、敎員某は急に手を以

て其鼻を掩ひしに、血は教員の手より溢れて甲板に落ちたり、此の時恐れ多くも、同艦乘組の華頂宮殿下には、生徒の傍に來られ、教員に向ひ、「あなた服物が汚れます」と仰せられながら手巾を出し給ひて、御手づから教員の手を拭はれ、尙は看護夫を御呼び遊ばされて、水もて生徒の鼻を冷さしめ、又軍醫に向はせられ「生徒を仰向け股間に挾んでやれ」ト仰せられたるに、頑是なき生徒は「厭で御坐ります恐ろしい」ト言ふにぞ、教員は傍より、そ の醫官たることを告げ決して恐るべからずと諭せしも、生徒は尙は「私は御醫者樣が恐ろしう御座ります」ト、遠慮もなく言ひ出るに、殿下を始め奉り、並み居る將校七八名ドッ卜と笑ひて、その最と愛らしきを興がり給ひぬ、殿下は更に教員に向ひ、「あなた此の處にて看護し、他生徒は別人に賴みて縱覽する樣なされては如何」ト仰せられしかど、教員は謹で御命に從ひ、生徒の附添人井上某に他生徒を托して縱覽せしめんとせしに、生徒は何れも「私は先生でなければ厭で御坐ります」ト言ふより、殿下には益々興がり給ひけり、軈て一年級の生徒は縱覽を終り、甲板に上りて整列するや、殿下には將校と共に御出あり、生徒に向ひ、「あなたは何歳ですか六ッであらうイヤ七ッですか」抔一々生徒の年齡を御尋ねあり、「この幼兒にして軍艦を見てやらうとの決心が愛らしい」など將校と共に語らひ給ひたりと承るだに有難き御心にはあらずや、又須崎にては、豫て三浦重作方を以て、殿下の御休憩所と定めありしも、殿下には引續き御當直にて、遂に上陸遊ばされざりしが、坪井將軍よりは、絹地に「登高岡處」の四文字を大書して、須崎小學校に贈られしと聞きぬ。

●鰉漁取締　瀨田川の名產ヒガイ魚は、畏くも天皇陛下の御膳部に上れど、古來其の名に當る漢字なかりしが、今回或る筋にて、鰉の字を用ふる事とし、同

時に瀬田村磯田清右衛門氏へ、宮内省より命ぜらるゝ所あり、氏は其の保護所を設け、漁夫の獲たる鯇は一々檢査し、御用適當の魚を選びて、右保護所に放つことゝなしたるよし、昨今は、目方十五匁以上の揃ひたる鯇六十匹づゝを氷詰として、毎日滋賀縣廳より宮内省へ差送り居るとぞ。

●福羽美靜作りさふらふ　子爵福羽美靜氏、此の頃思ひ籠たるふしありて、樂焼の名手浦野乾哉氏を、角筈の館に招き、庭の面に燒竈築せて、自ら土を揑ね、一週餘の功を積みて、人丸の座像二体を作りけるが、其は石見の國の住人柿本の何がしが秘藏の畫圖を寫せしものと云へり。齋藤彦麿翁の記に曰ふ。石見の國人丸塚のほとりに柿本家あり、代々農なれども、歌よむに一種の才ありと聞き、或る偕の尋ねて歌一つよみてと乞ひけるに、當時の主人、常には文字さへろくゝかき得ざりけれども、いと迷惑の体なりしが、再三の需めに餘儀なく筆取りて

ことのはを問はれてなにといは見がた
人丸塚のもとに住めども

と書きて與へけり、予も後其の主人を見るに、朴訥なる一農夫に過ぎざりしかど、或は歌の神の奇しくも守り給へりてふ言ひならはせに違はざらんか云々とあり。思ふに、福羽氏が乾哉と共に作られし人丸の像も、原圖は彦麿翁が所謂、柿本家の重物なるべし、扨右二座の像の見事に出來ぬれど、氏は其の一つを　皇后陛下へ奉らんとて其の裏へ

石見なるろれのゆかりにつゝしみて
ふくぞよしゝづゝくりさふらふ

と鐫りたりとなん、また他の一つは、高崎御歌所の長にや贈らんなど思はれけん其の裏へも

石見なるろれのゆかりにつゝしみて
ふくぞよしゝづこれつくりけり

と錦られけるとぞ、太平の餘事、興あるすさみにこそ。

●福岡の松葉織　福岡縣福岡市長谷川峰三郎、篠原千代松氏等の專賣特許に係る、松葉織と云へる敷物あり、先頃金子農商務次官が同地巡回の際、之を買ひ求めて歸京の上、榎本大臣に呈したるに、大臣は殊の外賛賞し、曾て露國駐在中フヒンランド國に於て、松葉もて織成せし衣服を一見せしことありしが、松林の空氣を呼吸するは治肺に効あれど、松葉もて織成せる衣服を着し、常に其の香を嗅ぐも、同じく効驗ありとて、露國にては、同患者之を洋服の上衣又は短胴服等に仕立て着用する有様なり、此の福岡製の敷物は、技倆と云ひ、色合と云ひ、縞柄と云ひ、申分なけれど、將來製造人に於て單に之を敷物に織立るのみならず、洋服地、又は日本服の上着等に仕立て着服し得るやうにしては如何と談話ありたり、敷物と衣服とは其の質最も異なるものなれど、隨分困難ならんが、今一層進步して洋服地等を組成するに至らざ、今日の如く肺病患者の多き本邦に於ては、衛生上にも利益あるべしと、金子次官より緒方福岡縣書記官の許に通知したるよし。

●流行の夏衣　更衣の頃となりたれど、今年夏衣の主なる流行物を記さんに、最も新しく特色あるものは、縞絽の帶地、袴地、着尺等なるが、縞柄高尚にして皺を生ずることなく、暑中適當のものならん、此の他に、紋織上布吉野上布あり、風通御召の如き柄にて帷子に代用せらる、又絞り絽は婦人の下締長襦袢用に適せり、薩摩越後の上布透綾縮は、昔よりかはらず賞用せられ、追々新柄を工夫せり、色合の流行は、朧紫紺、小豆紫紺、富士茶御柿、高麗茶、熨斗目花色、吾妻納戸、高砂鼠等にて、今後流行の傾きあるは、茶氣を含みたる色合なるが如しと云ふ。

社告

本社は今まで、諸方の姫たちよりおくらる丶、兼題の歌文の、締切の期日までに、到着せしもの丶中より、特にすぐれたるもの三四首を撰み出して、天地人の三才に配し、其の撰みに當り玉へる方々へは、それ〴〵定めの如く、（天三部、地二部、人一部）本誌をおくり參らせ、其の他はすべて、到着の順に紙上に掲ぐる例なりしが、近き比は、歌文の數いたく增りて、歌は常に、數百首に上るやうなりたるに、今までの如く、僅かに三四首のみ撰み出さん定めにては、殆んど、同趣同巧にして、甲乙を定がたきほどのものも、一は撰歌として、賞品を受くる上に特筆せられ、一は到着の順に、なみ〳〵の者の中に列ね記さる丶事となりて、撰みにもれし人々の心にも、いかばかり悔しからんと、思ひやらる丶によりて、今よりは、天地人の外に、秀逸といふをおきて、三才の撰みにはもれたれども、なほ、並々のものにはすぐれたるものを拔き出で丶、其の次に書し、その他をば從前のごとく、到着の順に從ひて、列ね記すべければ、この心を得て、今まで、撰みにもれ給ひし人々も、ふるひて詠み出でたまへかし。

なほ、添へて聞え參らする事は、かね〴〵紙上に聞え參らせし如く、原稿は歌にまれ文にまれ、題ごとに別紙に書し、文字は鮮明に、假名は萬葉假名を用ひず、普通のもののみを用ひ、又、歌一首の上に、上の句の中に、二こゑの漢字二字を用ひ、下の句の中に、二こゑ　漢字一字を用ひて、左の書式の如く認め、發行日より十日前に必ず、本社にいたりつく樣おくられたし。此の定めに違へるものは、すべて採用せざるべければ、よく心したまひてよ。

書式（用紙は半紙形にて、歌は一人二首に限る）

題		住所　姓名
初句……二句……三句……		
四句……五句……		
初句……二句……三句……		
四句……五句……		



六月廿日兼題　六月大祓

天　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

みそぎしてかへるたもとの夕風に
　こゝろまでこそ涼しかりけれ

地　福島縣幸折町本町　吾妻ちか子

河波の下にや秋のかよふらん
　夏はらひするたもと涼しも

人　日本橋區村松町四十八番地　杉浦いと子

みそぎして川ふてに皆つきはてし
　今日の心をちとせにもかな

秀逸　（十首）

山川のきよきながれにみそぎして　名取正代子
　人にしられぬつみやながさむ

みそぎ川やそ瀬の波をくみわけて　佐々有鄰子
　罪みなつきのはらひせしかな

こゝたくの罪もなかしてみそぎ川　小町谷里江子
　かへる心はすゝしかりけり

ぬさとりて昔ながらのみそぎ川　小町谷園子
　罪もあつさもながしつるかな

ゆく水のそこよりきよしみそぎ川　櫻井はな子
　なつはらひして歸るこゝろは

犯しるつ罪も今日こそみそぎかは　小野田のぶ子
　はや瀬の水のあわときゆらん

みそぎ川ゆふべの風のすゝしさや　勝もゝ代子
　つみと流れししるしなるらん

みそぎ川夜深きかぜのすゝしさは　秋原しげる子
　つみも共にや夏もながれし

つみとがと共にや夏も流れけん　降田まき子
　たもとすゝしきかもの川かぜ

五十鈴川清きながれにみそぎして　奥原ふく子
　こゝろのちりをあらふ今日哉

（以下原稿到着順）

水無月の御祓のぬさもゆふかぜに　諸井くら子
　流れてはやきかものかはなみ

をかしつるつみも流れてみそぎ川　舘脇ます子

ぬさふく風もすゝしかりけり

うきことも今日みなつきの河波に　御祓のぬさをなかしつるかな　田中冬子

御祓川あさの葉なかすはやき瀬に　とまらぬ年のもなかをそ知る　池谷とみ子

行く水のなかれもはやきかも川に　御祓のぬさのきよきけふかな　古矢かま子

かも川やゆふ浪わけてみそきする　人のこゝろもすゝしかるらん　柳田さと子

水無月の今日のはらひをする人や　いく年かけていのちのふらん　松尾こと子

打ちつとひ清き川邊にみそきして　かへるこゝろは涼しかりけり　増田すゑ子

みそきして罪もむくいもみな月の　川瀬すゝしくかへるなみかな　佐々千鶴子

いさ共にぬさ引きはへてかも川の　清き瀬にこそ御そきをはせぬ　上條よし子

罪とかをはらへは清きみたらしの　川瀬にかよふかせのすゝしさ　百瀬かつ子

年月につもりしつみをみそきして　かへるたもとそ涼しかりける　百瀬八代子

罪といふ罪はなけれとみそきかは　世のひとなみになつはらひせむ　牧野貞子

ひとなみに禊してましこれとわか　身にをかしつる罪はなけれと　牧野定子

罪とかをうちはらひつる衣手に　涼しくわたるかものかはかせ　牧野峰子

みそきして思ふふしをは祈りてむ　千代よろつ代の神のまにく　牧野淋子

なつはつるしるしとそしる禊する　みたらし川のかせのすゝしさ　關千代子

思ふこと皆つきはつるしるしには　いすゝの川のみそきすゝしき　關とら子

禊する五十鈴のかはのなかれには　きよくもすめるなつのよの月　井澤須美子

麻のはをみたらしかはの早き瀬に　なかしてつみをはらへつる哉　仁井田とみ子

みにつもる罪とかよりも御祓かは　まつ流さなん今日のあつさを　楠精子

年毎にみのうきことはつきせねと　なほみなつきの御祓こそせめ　島田好子

諸人のみそきになかすあさのはの　木村兼子

よるせもあらす夏のゆくかな

うきこともみな月はつるみそき川　野田千代子
夕なみかけてこぬ人ぞなき

きみかよをいゝすのかはに禊して　中島房子
千代萬代をなほもいのらん

みそき川なつとあきとの中つせに　水島良子
白ゆふよするなみのしつけき

罪とかを水無月はらひするみには　松原常子
百世のあきもきよくへぬらん

つみとかもきよく涼しく流れけり　澤田俊子
みもすそ川にはらひしつれむ

罪とかをたゝすの川にみそきして　曾山みち子
わかへなんよをやすく過さまし

諸人はみそきしぬらんあさのはに　溝口奈保子
よせくるなみに罪なかすとて

うきことも皆つきはてゝみそき川　小川金子
夕なみわけてこぬひともなし

みそきしてかへる袂にふきれくる　小川富子
風もこゝろもすゝしかりけり

禊してかへるころものすゝしきは　神田樂子
またきに秋のかせやたつらん

あつさをもなかして涼しみそき川　岡田波子
なつとあきとの中つせにして

人みなのこゝろも淸くなるものは　芝田秀子
なつの川へのみそきなりけり

心さへさやけきかはにみそきして　荒川淸子
罪もあつさもなかしつるかな

みそきする人のたもとの凉しさに　佐沼房子
かもの川原にあきたるらし

みな月の月みぬころにみそゝけは　佐藤かめを子
いまも神代のこゝろこそすれ

罪とがを祓ふみそぎのしるしにや　太田たけ子
こゝろの雲もはれわたりけり

みそきして眞心きよくいのりなは　岡田よね子
あらふる神もきかさらめやは

としなみのれいのかずをも六月の　住山幾子
みそきのぬさと流す瀬もかな

よどみなくながるゝ水に罪とがを　甲斐莊優子
はらひてかへる夏のゆふくれ

いすゞ川せゝによどまぬ麻の葉は　羽田三緒子
はらう御祓のしるしなるらん

世のちりもけふの禊にかきなかし　河田いし子

こゝろすゝしきかものかは風

吉野川なかるゝみつのさやかにも
天つつみをもはらへけるかな　粟田口信子

みそきしてかへる衣もすかくし
かものかは風そてにかよひて　田代 艶子

はらひして袂もかろく成りぬれは
わきて心はすゝしかりけり　星野 仁子

水上のすめるなかれにみそきして
すかくしくもぬるゝ袖かな　星野かづ子

みなつきのはらへ涼しきみそき河
なほゆくすゑも祈りつるかな　小幡富美代子

みそきかは瀬の音涼しき夕なみに
夏ははやくもなかれはてけん　山田 榮子

みな月のみそき川原にまがつみを
いのりきよめてはらふ神わざ　碓井 武子

おしなへて一夜をこめて六月の
けふはなこしの祓するなり　碓井 信子

みそぎする夏の小川のかみつせに
はらふのりとの聲そ涼しき　碓井和可子

ゆふかけてきよき汀にみそきする
人のたもとやすゝしかるらむ　北島 松子

はらひしてかへる袂のきよければ
こゝろのうちも涼しかりけり　黒澤 榮子

いろのかみ古きためしの流れきて
いまも河せにみそきをそする　廣瀬喜久子

みそきする早川のせのせをはやみ
身のつみとかもみつの白なみ　前澤 幸子

五十鈴川けふみな月のはらひして
かへるたもとに通ふあきかせ　植木 鋼子

五十鈴川夕なみすゝしあまつゝみ
夏もゆくせにはらへなかして　河野 文子

風そよくならの小川にみそきして
つみみな月のゆふべすゝしも　土肥 仙子

年波のなかにこえゆくみそきかは
すゝしき風そなつもとまらず　平山 房子

つみとかをはらへつくして御祓川
まつ涼しきはこゝろなりけり　三浦とき子

涼しさの何れはわれとみそきして
歸るたもとにかよふかはかせ　太田 貞子

名もきよきかもの宮居の川やしろ
なかす御祓にこゝろすゝしき　田中 麟子

つみとかを夏はらへしてあすか川　小野寺竹子

かへるたもとそ涼しかりける

夕まくれ吹くかはかせの涼しさに
夏ともしらぬみそきしてけり　武田粲子

みそきしてかへるたもとに早瀬川
夏をなかしてわき風そふく　鎌田菊野子

みろき川波のしらゆふとりかけて
君かちとせをまつひのるなり　河野多加子

榊はにゆふとりして〻みそきする
かものかはかせ涼しかりけり　河野八重子

川のせにみの罪とかをはらひすて
かへるたもとにわき風ろふく　河野さまね子

こ〻たくの罪をみろきて歸るさの
たもとす〻しきかものかは風　菊池すゑ子

みろき川なつもゆくせのゆふ風に
す〻しくか〻る波のしらゆふ　力丸きみ子

禊してかへるゆふへはかはの瀬に
たもと涼しくわきかせそふく　萩原章子

打ちよする波の白ゆふかけまくも
きよきみきはに夏はらひせむ　小曾根しう子

にこりなき御祓の川にはらひして
かへる夕への心涼しさ　大谷津こと子

みそき川なかる〻罪は見ねとも
鳴る瀬のたとにしられぬる哉　高田清子

水清きならのをかはにみろきして
こ〻ろの塵もなかれぬるかな　彦坂たか子

罪といふつみをなかしてみろき川
かへるたもとは涼しかりけり　眞鍋直子

うきことも早き川せになかしすて
こ〻ろ涼しくなりにけるかな　藤林ます[illegible]

こ〻ろさへ涼しくなりぬみそき川
かへらぬ水になつをなかして　八十島きさ子

夏川にす〻しさそへてつみとかを
はらひて歸るこ〻ちうれしも　樹下安子

みろきして歸るたもとに嬉しくも
す〻しくかよふ秋のはつかせ　中野わき子

罪とかを犯さぬれのかこ〻ろには
みろきす〻しく覺ねさりけり　飯田ひろ子

流れてはかへらぬ水にたくひつ〻
みそきの川にすつるぬさかな　島田悦子

みろきして歸るすみたの川のへは
たもとにわまる風そす〻しき　高瀬孝子

みそきする川へにわきの心ちして　東條不二子

風もすゞしくなりにけるかな

みろきせは流れ靜けくれもはねて　東條菊子
名ころ知ちるれれとなしの川

古語のやさしきなかにうれしきは　山口千代子
とかみなつきのはらひなり哉

みのとかをはらひし袖にふく風は　有坂清子
こゝろとともに涼しかりけり

ひの川のきよきなかれに御祓して　山根久子
こゝろもすかになりにける哉

思ふこともみなつき影もきよきせの　小池まさ子
みたらし川のはらひすゞしも

住吉のなこしのはらへさよふけて　久保田りつ子
わきなしらふる岸のまつかせ

川風にとしのなかはのわざはひを　桂田らん子
はらふもうれし今日のみろきに

六月のなこしのはらへなしつれは　北村孝子
きよく涼しくなるろうれしき

むかしより今の世迄もれしなへて　北村てい子
なこしのはらひせぬ人ろなき

みたらしの川の夕かせいとすゞし　大溪わき子
神のみまへにみろきせしみは

みそき川きよき川せにはらひして　大溪繁子
わつさもけふはみなつきに哉

殘りなく罪をなかしてみそきかは　野崎章子
こゝろの底のきよくもあるかな

むかしより今にたねせぬ水無月の　白石藤子
みろきはきよし神のみまへに

れのか身にかゝる萬のわさはひを　青木春子
はらひたまへや今日の御祓に

みなつきの水底きよきみそきかは　伊東みよ子
夏もかきりとかよふあきかせ

けふまでのつみは流しておすか川　鎌形素子
おすともいはすこゝろすみ鳧

罪といふつみはなけれと五十鈴川　山本常子
きよき川瀬にみろきしてまし

まか罪を清きなかれにはらへして　林久子
いのるこゝろを神やうくらむ

いすゞ川きよきなかれに御祓して　廣田とめ子
のこれるつみはあらしとろ思ふ

麻のはにこゝろをこめてみろき川　渡邊すけ子
なかれすゞしきなみの白ゆふ

みそき川せゝにうかへる麻のはの　渡邊たけ子

こゝろもきよし夏はらひかな

かぎりなく涼しきものは加茂川に　昌山千代子
みそぎせしよの心なりけり

六月廿日兼題　子規を聞く　（天地人のほかは原稿到着順）

天　播磨龍野　眞鍋直子

親しき友の音信さへ絶えて、日數ふる梅雨の空、いといふせくて、つれ〳〵のなぐさむかたなさに、獨り物語文など取りいだしてよみ居しに、思ひもかけず、郭公の、まと近う二聲三こゑ啼きすてゝ過ぎ行きぬ、日頃待ち渡りし物から、かくをやなう降り暮すわま夜のおはつかなきに、かくてはいかでとおもひなだめ居りしをりとて、一しほなつかしうて

いふせさを思ひたへよと子規
待たぬ雨夜の空に聞くらん

地　長野縣長野町　太田貞子

花染め衣いつしかあせ果てゝ、霞の袖も夢のまにうつろひぬ、春や樂しと梢はなれずうたひ暮し、鶯の行くへ皆みつるほどに、はやくも若葉の風心地よく、垣の卯の花さへ盛りになれど、いかでことしはと、初音をのみ待ちわたる心盡しもよそに、さるべき忍びねをだにつゆもらさぬことのうらめしさよ、待たできゝつるなどいひしもあれど、いでこよひは、閨のうちにてもきかんなど、ひとりごちつゝ、やをらたち入らんとする折りしも、ほの〴〵となのり出でつるうれしさものから猶いとゞおぼつかなさに、いかで今一聲もと、耳傾くるに、こたびは聲高う、續け樣に啼きいでたる、いはん方もなう、明けど先づ母上姉上にも知らせまゐらせん、友にもかたらましなどおもふに、いよ〳〵うれしさのやる方もなきを、われも山ほとゝぎすにならひて、ひとことかくなん。

人　肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子

在明の月は、學の窓の小簾をてらし、山寺の曉鐘は、をこたりの枕をゆすり、夏の夜もあけなんとする東の空たかく、雲のはたてに一聲きこえぬるは、いはでもしるき郭公の、時たがへずもらしつるなりけり、こを思ふにもあな心なき鳥にも及ばぬは、時世しらぬ山かけのふせいほすまひの妾になんありける、あはれ都に出てて、致の庭の處にもうるはひなど、かかるかたくなにはあらざらましものを、意にまかせぬもうきよのならひならんと、郭公の聲ききて、おもひの淵にしづみてかくはしるしぬ。

牧野　貞子

ことしも遠近の景色、みどり深うなりゆけは、例の子規の初音きかまはしうて、去年人つてにきゝつるがいとロをしう思ふ物から、かねてより、卯花橘など、軒ちかう移しうゑ、五月雨はるゝあした、月さやかなる夜半など、心から耳かたむくるも、それと思ふかすかなる音つれもなきは、何我家をうとみてかと、ひとりかこつ間に、卯の花はちり、立花も匂ひあはせつる夕まくれ、梅雨なごりなうはれそめて、こゝかしこ、星のかずさへよまるゝに、いと〳〵うれしくて、月のいづるをなん、今よとせめてもの心やりに、待渡る折から、あやしき影の過ぐと見る間に、一こゑさけびて雲まにかくれぬ、これぞかねて待ちにし鳥ならんとは、たゞたゞ夢のやうなる心地のみして、

こゝろあてに待ちにしつきのそらよりも
れもひまうけすなくほとゝぎす

河野多加子

花はとくちりて、若葉とかはり、胡蝶は羽ををさめて、螢とかはり、池のあやめも、ほのめきかゝるものを、いかで子規のみ、時を後れたるかなど、ひとりごちつゝ、書窓のあなたながむる時しも、これ聞けがしに、一聲高らかになきつゝ、大空を過ぎ行くは、今しもかこちし時鳥になん、今一聲をとよびしに、いつの間にきにけん　あないもせず思ふ友どち二人三人、音つれくれしかは、共々に時鳥をきくてふ題にて、歌よみ文かきなどして暮しぬ。

碓井　信子

花のさかりもゆめのまに過ぎゆきて、鶯の老さびたる聲もたえはてし此頃、唯だ木々のみどりのいやふかき今宵、幸に雨後の月のいと清けれど、いざほとゝぎすのなく音きかむやと、庭さきにさまよひありきける程に、いつしか月かげのかたぶきそめて、ふけゆくさまの、なんとなうあたり淋しくものすごけれど口をしうながら家にいなんとて、ふりかへる折しも、いづこにてか、二聲ばかりほのかになのりいでたる嬉しさに

よもすがら山ほとゝぎすまちかねし
さ月のこよひはつねきくかな

とくちずさみつゝ、床にいりぬるまもなく、夜はあけにけり。

名取正代子

春まちしより、まつとまたるゝ物の多かる中に、梅は咲けども、鶯のなとて來鳴かさるらんと、かこちしも、

はやきのうにて、今は櫻もちりはてゝ、うつきの花の時を得たりが、梅雨の露の白玉がさしつゝ、こぼれむばかりに咲きみたれたり、軒のたちばなも、きのふけふ、かをり初めにけり、など、時鳥のいまた一聲をも、もらさゞるや、いたくもまたせぬる事よと、いひも終らぬに、それかあらぬかとむかり、いとほのかに、聞こゆる一聲は、げに雲間の月よりもめつらしうて、あはれと、はしちかくいでゝ、あふぎ見れど、今しも梅雨の晴間にて、いとおぼろなる月影の見ゆるに、こよなううれしうて、いかで時鳥の今一こゑ高くもかなと、おもふ折しも、又二聲三こゑ遠く鳴きすてゝ過ぐるを、あはれいづちなるらんと、打見やるに、姿はいづこども わかぬ間に、はや定めなき梅雨の、空かきくもりて、雨のぞゝき來ぬるに、いよゝあかずなつかしう覺えてなむ。

佐藤かめを子

にしきをかざるしきしまの大和櫻も散りはてて、今はまがきの邊に、卯月の花や山吹の花など、人待ち顔に咲きみだれ、降りみふらずみ五月雨の空定まらぬ夕まぐれ、何處ならん時鳥の啼く聲すなり、いでや見ん者と、雨戸を押しひらき眺めんとすれども、影もなし、そばふる雨は時鳥の涙ならんか、見る吾れさへ袖ぬれて、悲しく物を思ひ居れど、池の藤浪色まして風になびくさまもいと哀れなり、かゝるをりから、古郷の事など思ひ忍ばれて、母上には如何れはすらんと、空打ち眺めたゝずめど、又もや高く雲井に名のる聲すなり、さてはと見れど、又もみえぬなり、物思ふ吾れに、聲のみ殘して、今は何處へ迷ふらん、哀れ時鳥、何を悲みて鳴くならん、聞かまほしき心地ぞする。

植木鋼子

日數ふる五月雨に、間來る友もなく、夕暮の物淋しきに、ひとり花立花の軒近く香に匂ひて、あるじをなくさめ顔なるぞあはれなる、折節時鳥のさやかに一聲なれどつれて過行くあり、あななつかしといそぎ立ち出てつれど、雲にや入りけん風と共にや過ぎけん、はや影もなし、名殘惜しといふもなかなかなりや、まして幾夜むなしく待ち明しける人の、今宵初めて聞き得たる心地ろいかならん、世に百鳥のうるはしきさへつりは數多あれど、時鳥ほど人の心をけたけしむるはあらじかし、されば古人も、物思ふ我に聲な聞せそ、あるは、夜の雨に涙な添へそなど、さまざまにいひでられけん、我また何事をしのふといふ身にしあらねど。

桂田うた子

朝まだきより、五月雨ふりつゞきて、文よめどもたのしからず、たちぬひの業も心にまかせず、そゞろに過ぎこしかたの胸に浮び出で丶、亡き人の事など思ひわづらふ折しも、雲井はるかに、子規の聲しめやかに聞ねぬ、汝もくもりがちなる空をやうらむらん、降りつゞける雨をや嘆つらん、身は異なれど自ら心のかよへる汝の今さらにしのばれて、窓押しあけて、とかうながむれど、空は一つらにかきくもり、雨はたゆみなくふりしきりて、影だに見ねわかず、何處のくまに身をかくしけん、あはれ郭公よ。

松島花枝子

きのふ今日ふりしくさみだれにひたされて、吾が庭の面も、さながら池の如く、又蛙は時を得顔に、軒の下にまで飛び來て、いと拙なき聲を出して、なく聲も今はききあきぬれど、しばし文机に見をよせて、つれづれなるまゝ、文を見もて行くほどに、近う聲高くほとゝぎすの鳴き過ぎつれど、いととく窓の障子を開きて眺めしに、七重八重なる雲の間に、はやあとを溜めけん、かげだに今は見ねざりけり、指もて數ふるに、今宵は舊のいざよひなれど、いみじく降る五月雨に、月の光も蓋はれて、月なき頃よりも、一入暗きこそいとうらめしけれ。

あはれほとゝぎす、木の間にかけし己が巣も、したゝる露にぬれはてゝ、戀しきねぐらをよそにして、此の五月雨の眞夜中に、何處を指して行くなるか、まして今宵は風もおだやかならざるに、あはれほとゝぎす、あまりのかなしさに、吾が家の軒端に一と聲をもらせしにや。

迷ひ來て吾が軒の端を過ぎぬるに、なぞてやどらぬぞ、やまほとゝぎす。

鳴き過ぎしかなしみ深き子規の聲を聞きぬれど、吾が母のまかりしこぞの今宵も忍ばれて、そゞろに涙にむせびつるなり。

田津木久子

木々の梢も、みな若葉しげりあひて、みどりの色いと涼しきころとなりしより、日毎に思音もやと、まち渡れる鳥の、よすがとたのめる卯花は、はや散りすぎて、花たちはなも、はや盛りすくるほどになりぬれど、またれどつれぬのみかは、折々は聞きつと語る人さへあるに、いとゝ心いられて、夜深くやなくらん、殊に今宵は曇りかちにて、村雨のふりいでぬへきけはひなれは、いて夜もすからまち見はやと思ひ定めたるものから、また空た

のめにやと、いとおぼつかなく思ふ折しも、その心やかよひけん、ほのかなる聲もらせしに、おぼえずまどの戸おし明けて見れば、あひにあひて月さへ雲間をもれいでたるに、いとさやかにふたこゑまでもなきたる、そのうれしさいはんかたなくて。

八十島きさ子

妾いわけなきとき、ほとゝぎすといふ鳥は、啼音のをかしとて、あるは歌によみ、あるは文にかきて、もてはやすことの、ものに見ゑたれど、いかなるねにかなくらんと、母刀自にとへど、卯月のころ、深山をいで、雲井をかけりて、ほぞかけたかとなくよとをしへたまへり、いかにをかしからん、あはれ一聲だにきかまほしと、思ひけるまゝに、すこし年長けてのち、一年の卯月のそれの日、片山里にものして、一夜やどりしに、旅なれぬ身のものうくて得ねられず、夜ふくる折しも、あやしき聲雲井にひゞくは、なにならむと、耳かたむけてきけば、をさなきをり、母とじのをしへたまひしほとゝぎすの音にたがはず、さてはほとゝぎすになんと思へど、今一聲もがな、きかまほしと待つほどにみしか夜なれど、かひなくも、はやほの〴〵とあけわたりぬ。

　ほとゝぎす今一聲とまつほとに
　　かひなくあくる夏のみしか夜

飯田ひろ子

夜はいたくふけぬ、讀むも書くも皆うみはて、ねむりさへ催しぬ、今日のさらひまだ終へねど、心はげまし、猶机によれど、燈火のくらきにはあらぬを、文のおもては次第にくらうなりゆき、はてはなにも覺束なくなりぬ、をりしも一聲ほのかにゆかしく子規のなのりたれど、ふと目をさましぬ、遠き空にてかと思ひもあへぬに、羽ぶたき高く又一聲おどろくばかりに鳴きぬ、さてはそこにかと窓おしひらけど、涼しき月の影すみて、卯の花匂ふ垣根さやけく、たゞおとづるは窓にそへる竹の下風そよぐおとのみなり。

石原くにの子

或日はらからとゝもに、遠里なる親戚がりに招かれて行かんとて、あかつきの露ををかして門出しぬ、此日は天氣殊にうらゝかなれば、いさみて歩み行くに、路に〳〵小石ある野邊となり、ふみなれぬ事とて足をいため、をり〳〵いこひつゝ、右に左に折れ曲れる山路を越ゑ、やゝ叔父の家程近くなりぬれど、其の里の小學校の目下にありぬ、田舎のことにしあれど、谷間を開きて建てつらねたるも、さまで美しくはあらねとも、

こがたき排造ならんなど語らひつゝ見居る程に、ゆくりなくあなたの空に、子規の聲二聲聞きつゝきけれど、教員らしき人の、珍らしけに窓をおしあけ、空ながむるさまなるに、己等も何處ならんとながむれど、いかで子規の待つべしやは、はやかげたに見ゑぬをいとをしとさゝやきつゝ叔父の家にいたり門に入らんとせしをり、向ひの木立より、眞一文字にとびさけびたる聲のいとをかしうて。

島田悦子

花はいつしか散りはてゝ、青葉しげれる世となりぬ、見渡す限り、緑ならぬはなく、花に浮く心も、今は文の林に分け入りて、あちらこちらとかけぬなり、一と夜ゆくりなく皇國の史書を繙きて、讀み行く巻をかさねつつ、燈挑げて、遂に南北朝の御代にうつり、うたゝ胸にこたふるふしの多くして、楠公櫻井の驛訣別のくだりとはなりにけり、是に至りては、一層の感をまし、せきくる涙に得たへて、紙は血に染む心地せり、恰も杜鵑一聲耳に徹し、感はいよ／＼迫り、吾を忘れて打伏したり、嗚呼心なき杜鵑も、今や妾と同じ情にてありつるかと、漸く吾にかへり、戸を推せど、殘月僅に山のはにありて、東の空は、白雲遠くたなびけり。

近藤登志子

子規のすぎがてになく一聲だも、えきかぬ口をしさよ、今宵こそはと、妻戸おしひらき端居すれど、月もやうやうさし出て、前さいの青葉の稍、若かへて、なまめかしう、しげりあひて、雨の名殘の露に、月の影さへ光りをそへたる、げに玉をつらぬきたらん樣なり、まして窓近き橘の、そこはかとなく匂ひたるなど、こよなき代のさまなりかし、今や／＼と待ち渡り、古き歌とも口すさびつゝ、空打ちながむる折しも、何處ともなく、月こそ鳴きけめとまでふたがりに、一聲さやかになのりしたる、又なくめでたし、あはれ都は一こゑだも、たはやすくはきゝ得られぬものを、世はなれし庵に住む人は、日毎に聞きはやすらん、うらやましなど、思ひめぐらしつゝ、曉近うなりぬれど、枕のちり打ち拂ひぬ。

降田まき子

降りつゞきたる五月雨の、空名殘なく晴れ渡りたる夕まぐれ、花たちはなのそこはかと匂ひこぼれ、軒端のあやめもあらたにかをる心地して、いとすが／＼しけれど、端近う物するに、をりしも五月のなかばとて、まどかなる月かげさやかにさしのぼりて、若葉の梢をてらしたる、げにたぐふるものもなくをかしけれど、しぬ

し去りもやらで、ながめ居たるに、今年は遲しと、日頃待ちつけゐたる山ほとゝぎす、月とゝもにやうかれ出てけん、一聲高らなくねの聞ゆるに、いともめづらしく、いとも嬉しうて、やよや今一こゑ我宿に鳴けと、うちつぶやきつゝ、あふぎ見るに、いづち行きけん、聲ばかりを殘し、月をかすめて過ぎゆきたる、いと名ごり惜くうらめし

一聲を月にのこしてほとゝぎす
　いづこの里をたどり行くらん

あはれほとゝぎす、なが鳴く聲に、かはりはなけれど、ろをきく人々の心によりて、或はうれしとも、めづらしとも、はたかなしとて袂をしほるもあらん、あはれあはれ。

今藤なか子

鶯の初音嬉しと聞きつるは、昨日とのみ思はるゝに、今朝ははや、梅も櫻も、はた桃も、青葉がくれににぎはしく、夏きにけりとたちばなのにほふ軒ばに、一聲は月が鳴いたかほとゝきす、ねざめの耳にきこえしは、夢かうつゝかわかねども、今一聲きかましくなん。

れもひなき身は一こゑとほりすれと
　たひのうきみはいかにきくらん

小池まさ子

月日は迭に移りて、隙ゆく駒のいと過ぎやすく、遠の高嶺の白雲かとうたがはれし花は、谷のあくたとちりはて、軒近きほとりに、朝またきより啼きつゝけし黃鳥の音も、いつしか老いて、いとあはれに聞ゆ、若葉はみどりふかめて、梢をもるゝ月影の、いとなつかしく、小くらき窓のもとに、過ぎにし春のなほ戀しう、わが身のうへも思ひ出てひとりうちかこつ折しも、子規の鳴きわたる聲の、いたうあはれに覺ゆ、實に去年の此月は、我御國の爲に、いとも名譽ある戰死せられにし人等の、遺物など送りこされ、はかなき野邊のいとなみせし事ともれもひ出て、すゞろに袖ぬらしけれど、又もや不如歸〳〵と啼く聲に、窓打ちひらけば、月はいつしか入りて、あやめもわかぬ闇の籬に、たゞ卯花のかげのみ幽かなりけり。

北島松子

ひと聲にあけ行く夏のみじかよも、待つにはながき子規哉と。雨に月に、ひたすら待ち詫びし時鳥の、今日此頃、五月の空にふり出でて、かすかに初音洩しゝあしたより、庭の折戸のあけくれになつかしう語らうやうになりしも實に〳〵うれしく、いもねずよたゞ聞き明す

夜もありけり、一人きくもいと惜しけれど、日頃中よき友の許へ、待ちあこがれし子規の鳴く聲しげくなりにけれど、一日彼が宿を訪つれ給へ、天の川の流も早く、月のみふねの影もよどまぬよもすがら床しき音をききき、御物語など致し侍らんには、中々に面白き事になんなど、云ひ送りしに、否とよ、今日此頃は、妾かたにも朝な夕な更にしたひもあへぬ道なくねひまなくなりて、いと／＼うれしう侍るになむ、先づ妾かたへ出でき給へといひおこしぬ、げに我宿のみと思ひしは、いとはづかしき事になん、さはあれど、幾日里わかず鳴きわたるとも、などか聞きふるす人あらむ、

北島功子

先の日待ちしつらさを、思ひかへせとにや、今日此頃、柴のあみ戸のあけくれになれて、かたらふ子規の聲ききては、恨みしことの、我なからはづかしくて、夜半のねさめの憂さもうきとは思はれぬ計りなり、今宵も夜たゝ聞かはやと、姉君に請ひ奉りて、共々はしゐ近う立ち出てつゝ、待つほどに、むかひの森の茂みより、光々と出づる日の光りの、青葉にうつりて、其をかしきこと得もいはれず、しばし待つまをとふべかりとや、一聲高くなのれるに、今宵の初音と、姉君諸共、いそぎ見あぐれど、はや姿さへ見えず、澄める桂の月かけのみ、いつくの空にてか、いともの／＼しけれど、うちかへししくなく聲しけくなりければいと／＼うれしくて「ほととぎすなく聲しけくなりにけりいつくの里もまたて聞くらむ」など口すさみつゝ、夜もすから聞かんと思ふ程に、姉君の、はや夜もふけたらんやうにおぼゆれは、今宵は是にて、いざ諸共にねにつかむ、やよ妹よと、うながし給ふに、名殘はいとゞつきされど、進め給ふにいなみもならず、明日も亦なれをしたひまつべけれど、我より先に來なけかしなどひとりごちつゝ、各々己か臥床へとは入りぬ。

阿佛尼　　牧野貞子

なか／＼に子をおもふ闇はいさよひの
　月もさやかにてらさゝりけむ

夕立晴　　安井章子

かせろよく木々の梢につゆちりて
　しはしは涼しゆふたちのあと

新樹妨月　　鎌田菊野子

庭のおもは月のかけさへもらぬなり
　木々のあをはの茂りあひつゝ

夏月　小町谷里江子
なかむれは涼しかりけり夏の夜も
月にはあきのかけやうふらん

河遊夏月　河野文子
川そひの松のはこしにかけさして
なみにきらめく月のすゝしさ

静御前　三谷起美子
鶴か岡まつふくかせのねとよりも
きよきはきみか心なりけり

松間の花　近藤登志子
山まつのみとりすくなになりに鳬
このまの花のさきのさかりは

兎　中島房子
とくさむら月にあそふはますら男に
狩のこされしうさきなるらん

行路子規　松井佳子
小車のいそき行く手をよこぎりて
ひとこゑ高くなくほとゝぎす

鶏　高橋信子
友もなくよふかくこゆる山みちに
きくもうれしきにはとりの聲

井　畠山千代子
いにしへは誰か住居せし跡ならん
くさにうもるゝ常磐井のみづ

高尾　小町谷里江子
そこきよき心のほとぞくまれける
立ちしみさをは世に高くして

七月兼題

五日
歌……樹陰納涼
文……朝かほ

廿日
歌……瀧
文……苦熱の詞



生田目經德編

（六月二十日發賣）

標注 雅文消息集 全

●菊版美本

●全一冊

●定價金廿五錢

●郵稅四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもろの躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことゝなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側にたきて摸範となさば益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社 （電話番號一九四六）

女鑑第百拾號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御添附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十九年六月十九日印刷
同　年六月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所（電話番號一九四六）　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）

（明治二十四年八月八日內務省許可 明治廿五年三月十二日遞信省認可）